

特232

170

薩摩國の羣



始





恭しく此書を戦傷死者の

霊前に捧ぐ

大森區教育會長 岡崎榮松





朕茲ニ帝國議會開院ノ式ヲ行ヒ貴族院及衆議院ノ各員ニ告ク

帝國ト中華民國トノ提携協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ舉クルハ是レ

朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル 朕之ヲ遺トス今ヤ 朕カ軍人ハ百難ヲ排シテ其忠勇ヲ致シツ、アリ 是レ一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス

朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄以テ所期ノ目的ヲ達 成セムコトヲ望ム

朕ハ國務大臣ニ命シテ特ニ時局ニ關シ緊急ナル追加豫算案及法律案ヲ帝國議會ニ提出セ シム卿等克ク 朕カ意ヲ體シ和衷協贊ノ任ヲ竭サムコトヲ努メヨ



一信  
心兆

百根  
魁



大森區在住司令官

上海特別陸戰隊司令官 大川内少將閣下



上海派遣軍最高指揮官 松井大將閣下



愛國行進曲

見よ 東海の  
空明けて  
旭日高く 輝けば  
天地の正氣 激刺と  
希望は躍る 大八州  
おゝ 清朗の  
朝雲に  
聳ゆる 富士の姿こそ  
金剛無缺 播ぎなき  
我が日本の 誇なれ  
起て 一系の  
大君を  
光と 永久に戴きて  
臣民我等 皆共に  
御稜威に副はん 大使命

往け 八紘を  
宇となし  
四海の人を 導きて  
正しき平和 うち建てん  
理想は 華と咲き薫る  
いま 幾度か  
我が上に  
試練の嵐 哮るとも  
斷乎と守れ その正義  
進まん道は 一つのみ  
あゝ 悠遠の  
神代より  
轟く歩調 うけつけて  
大行進の 往く彼方  
皇國つねに 榮あれ

員動總精神民國

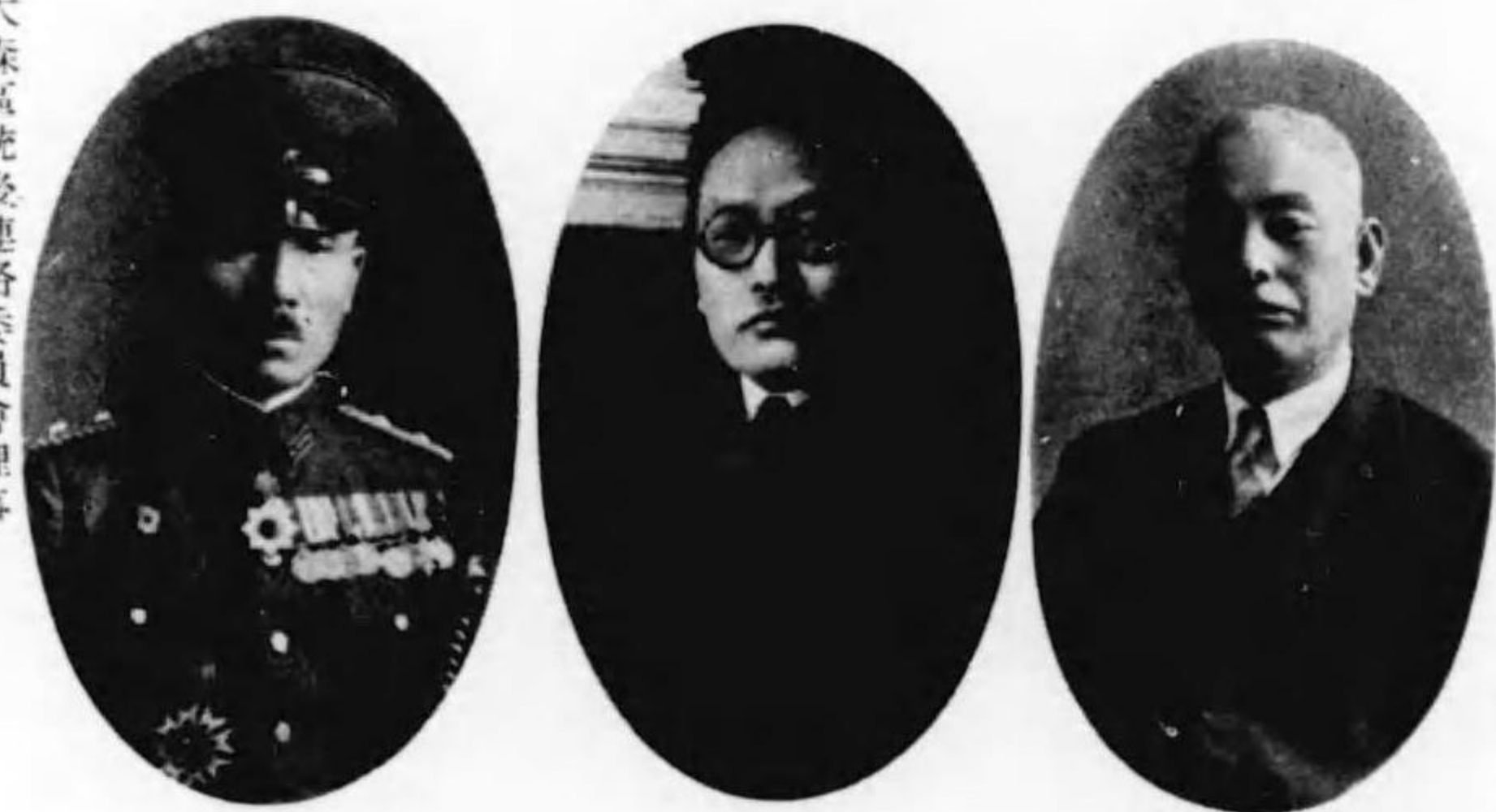


本門寺に於ける區民葬の状況



大森區銃後連絡委員會理事  
大森區會議長  
副齋主 佛木剛策氏

大森區銃後連絡委員會理事  
帝國在鄉軍人會大森區聯合分會長  
副齋主 子爵 立花種忠閣下



大森區銃後連絡委員會委員長  
齋主 大森區長岡崎榮松氏



目次

一、第七十二回帝國議會開院式勅語……………(一)

二、題 字……………(二)

三、寫 真……………(三)

四、卷 頭 言……………(四)

五、出征者を送るの辭……………(五)

六、護國の華……………(六)

七、戦傷の勇士……………(七)

八、戦線の卷……………(八)

    1. 武 勳……………(九)

    2. 陣中逸話……………(一〇)

    3. 戦線より銃後へ……………(一一)

九、銃後を護る……………(一二)

    1. 應召者家族の健氣な働き……………(一三)

    2. 歸郷者の美學……………(一四)

    3. 銃後の護……………(一五)

    4. 銃後の團體……………(一六)

十、編輯を了りて……………(一七)



## 發刊の辭

會長 岡崎榮松

本會では今次の支那事變の勃發と共に銳意銃後強化の爲に努め客年十月には國民精神總動員の趣意に基きまして前後五回に亘り講演映畫會を開催し區民諸君と共に時局に對する認識を新にする等微力を致して参りました。

顧みれば昨年七月聖戰の火蓋を切つて以來茲に一年、昨年十二月には早くも敵の首都南京は我忠勇な皇軍の爲に陥落されましたが頑迷な國民政府は長期抗日、焦土抗戰を呼號し徒らに歐米の支援に依存するのみならず尙無用の抗戰を止めませぬ、そこで我帝國は愈々徹底的膺懲の決意を固め、内は國民精神總動員の旗下にあらゆる國家的機構を整備し、外は防共協定の契を強化し、且つ今後は頑迷な國民政府を對手とせず新興政權の出現を待ち之と提携し以て東亞の平和に邁進すべくこれを内外に聲明するに至りました。

惟ふに今次の事變にあたり、陸に海に、北支に江南にあらゆる艱苦を凌いで暴戾な支那軍に對し膺懲の師を進めつゝある皇軍の壯烈な勇戦力闘に對しましては國民均しく感謝感激の涙にむせぶところでありますが之と同時に銃後を守る國民の熱誠に對しましては又此上もない力強さを感じるものであります。

今や北京に臨時政府、上海に維新政府が夫々成立して東亞和平の曙光は力強く輝き初めましたが、事變の前途は遠にして必ずしも樂觀を許しませぬ。所謂勝つて兜の緒を締る時で國民は愈々舉國一致し堅忍耐久以て盡忠報國の誠を致さねばならぬと存じます。



此時に當りまして本會が事變關係の美談集を編み、今次事變に護國の鬼と化した幾多の英靈を祀り其勳功を永へに稱へ、銃後の美學を世に顯はす所以のものは之等の人々に對し感謝感激の誠意を披瀝すると共に銃後國民として聊か教育報國、國民精神作興に資せんとする微衷に外ならぬのであります。殊に之に集むるところの資料は盡く之れ親愛な區民諸君の記録であるだけにどれ一つとして涙なしに見ることの出来ないものばかりであります。何卒御高覽の程を御願ひ申上ます。

之を以て本書刊行の御挨拶と致します。

終りに臨みまして本會の此舉に賛し資料提供等により御協力下さいました各位に對しまして厚く御禮申上げる次第で御座います。



## 送 辭

北支蘆溝橋に端を發したる支那事變は今や皇威華北全土に汎ねく上海江南の要衝を席卷しつゝあり即ち内は國民各層戰時體制を強化し外は益々抗日暴虐な支那軍膺懲の師を進む。古歌に曰く

海行かば水漬く屍山行かば草生す屍

おほきみへ 大皇の邊にこそ死なめかへりみはせじ

皇軍の意氣烈々勇猛果敢なる誠に此の句を如實に示すの概あり 陸海の鵬翼又支那全土を爆撃して敵膽を寒からしむ。

これ實に軍民結束暴慢非禮なる外敵を除く大和魂を具現する處にして、街に老幼將兵を送る歡聲湧き、慰問獻金殺到して、後顧を安んじ將兵をして皇國精神發揚を助けつゝあり。

今又忠烈なる諸氏勇躍征途に上らんとするに當り並に

謹んで大森區會の決議によりその壯途を祝し併せて武運長久を祈り區民と共にその光榮を喜ぶ。今後我等益々銃後の護に専念し後顧の憂なからんことを期す。諸氏愈々自重自愛邦家の爲至誠奉公の實を揚げられんことを希ふ。

大森區長 岡 崎 榮 松

大森區會議長 佛 木 剛 策



特232  
170

護  
國  
の  
華

護國の華



(區民葬執行順に依る)



故陸軍航空兵中尉  
從七位勳七等

谷田部 寛藏 君

大森區調布鷓木町  
二四番地

一、明治三十五年十月三十日生

一、昭和十二年七月九日出動

一、同年九月十九日午前六時三十四分、九四式偵察機第七七八號に搭乗し太原飛行場爆撃に向ひ同八時四十分太原飛行場に敵格納庫、並に中型機三機あるを認め之を爆撃し完全に撃破し歸還せんとするや、敵戦闘機後方より追尾攻撃し來るを發見直に編隊の儘空中戦闘を開始したり。戦闘數刻にして谷田部機は編隊と離れ敵機五機の包圍攻撃を受けて奮戦し敵一機を撃墜せしも衆寡敵せず遂に壯烈なる戦死を遂げられたり。



故陸軍歩兵伍長

山邊 武治 君

大森區田園調布  
三ノ六六八番地

一、大正五年四月七日生

一、昭和九年三月、攻玉社中學卒業

昭和十二年一月二十六日、滿洲國へ派遣され軍隊訓練を受けつゝ支那滿洲國の樂土建設の爲之が守備陣にあり、あらゆる困苦に堪へよく其本分をつくしつゝありしも不幸八月病を得てチチハルの陸軍病院に收容され療養につとめしもついに逝去さる。





故陸軍歩兵上等兵

野村太郎君

大森區田園調布

二ノ一三六〇

一、大正五年二月十五日生

昭和十二年三月一日、公主嶺長谷川部隊に入隊、支那事變中北支に轉戦し八月二十五日孔家莊附近の戦闘に於て敢然我に數倍する敵を壓迫し是を包圍全滅せんとせし際不幸敵の銃弾を浴び敵前に斃れたるも自若として『天皇陛下萬歳中隊一同左様なら』と叫びつゝ從容として壯烈なる戦死を遂げらる。



故陸軍砲兵上等兵

稻垣隆君

大森區池上本町

三一

一、明治四十三年十月十五日生

一、昭和十二年七月二十一日、充員召集を受け矢島部隊に應召出征以來自動車隊本來の任務たる軍需品の補給輸送に従ひ北支の曠野を縦横に馳驅しつゝありしが九月二十四日直接第一線協力を命ぜらるゝや敢然死地に赴き翌二十五日午前九時十五分頃敵正規軍一ヶ旅に遭遇し中隊全員百七十六名と共に激戦四時間同君は白衛隊に参加我に十數倍せる敵と對抗し有効なる射撃を加へ居たりしが、遂に奮然銃剣を採りて敵中に突入群がる敵を薙倒し追散し居りたる際不幸一彈腹部に命中するところとなり遂に壯烈なる戦死を遂げられたり。



故陸軍歩兵上等兵

平野文吉君

大森區大森

三ノ二六二

一、明治三十九年七月三十日生

一、昭和十二年九月九日充員召集福井部隊に所属上海戦線の激戦地吳淞附近の戦闘に参加せり即ち我〇〇右翼隊の一員として〇〇左翼に進出し吳淞『クリーク』北岸地區敵堅陣地帯の樞軸たる中興宅、寶家弄及び須宅附近の頑強なる敵陣地に對し九月二十八日以來攻撃前進を繼續し人力の限りを盡す敵は銃眼、掩蔽壕交通壕を四方に設け巧妙極まる連絡を保ち我軍の進撃を阻止す。平野君此に参加し敵を繼續攻撃すること十數日遂に之を破り敵軍をして吳淞『クリーク』南岸に退却の止むなきに到らしめ、尙之を急追申九月二十九日敵の集中銃砲火を受け遂に壯烈なる戦死を遂げられたり



故陸軍歩兵上等兵

長谷川勤次郎君

大森區新井宿

六ノ六六一

一、大正四年八月十五日生

一、昭和十一年一月十日歩兵第一聯隊に入隊

一、昭和十一年五月八日滿洲に派遣

昭和十一年滿洲出動以來各地の掃匪戦線に従ひ屢戦功を樹て翌十二年十月三十一日寛甸縣第三區附近の匪討伐線に参加勇戦力闘中不幸敵銃砲火の集中を受け遂に名譽の戦死を遂げられたり





故陸軍歩兵少佐  
從六位勳六等  
**阿部純隆君**  
大森區久ヶ原町四五番地

- 一、明治二十三年九月三十日生
- 一、大正元年五月陸軍士官學校卒業
- 一、大正十一年四月任陸軍歩兵大尉
- 一、同十二年三月豫備役被仰付

昭和十二年八月二十五日今次事變に際し臨時召集により加納部隊に應召、越えて九月二十日吳淞上陸二十七日敵前八〇〇米に進撃十月一日早くも敵彈雨飛の中金家宅を占據益々進撃し十月六日午前八時頃小宅に於て敵の包圍を受け大隊と連絡せんとせし時敵彈の爲負傷す君は之に屈せず翌七日蕪藻濱クリク北岸地區の戰鬪に於て中隊を指揮中、頭部貫通銃創右肩へ擦過傷左肩へ貫通銃創を受けられ大玉宅第二野戰病院に收容手當を受け遂に同月十日逝去せらる。

出發以來終始部下に對する愛情實に溢るゝ如く部下より人情中隊長として思慕と尊敬を受けられしと。君の部下が墓標の前に「千鳥の曲」を吹奏する寫眞は幾多内地の人々の涙をしぼりしことか又以て古武士の如き其倂をしのぶに足る。



故陸軍歩兵軍曹  
**長田敬次郎君**  
大森區上池上町  
一、〇三三番地

- 一、明治三十八年五月十八日生

一、昭和十二年九月九月應召、福井部隊に屬す、海上陸以來數度の激戰の後翌十月十二日玉宅附近の戰鬪に於て頭部貫通銃創を受け遂に名譽の戰死を遂げらる、留守宅には未亡人トヨ子(二六)の外長女數子(三才)を遺す。



故陸軍歩兵伍長勳八等  
**山本範一君**  
大森區調布鶴ノ木町  
七四

- 一、明治四十五年四月二十五日生

一、昭和十二年九月三日事變に際し加納部隊に充員召集、越えて十月九日午前十一時蕪藻濱クリク戰に於て渡河激戰中、頭部貫通銃創を受け遂に名譽の戰死を遂げらる。



故陸軍歩兵伍長勳八等  
**松浦彌二君**  
大森區石川町一七四

- 一、大正元年十二月七月生
- (中隊長の戰死情況通知書)

(前略)……同君は上陸以來激戰に次々に激戰常に奮戰其の勇敢なる動作は兵の模範なりき。小朱宅附近の攻撃に於て敵は我に十數倍掩蓋を有する陣地を構築し其彈丸雨の如し。加ふるに敵は衆を頼み逆襲し來り本部附近に黒山の如く攻撃し來る之を見るや彌二君は卒先進出、輕機分隊長として敵の側面に進出猛烈なる射撃を及びせ敵をして潰走せしむ、其勇敢なる動作により敵の倒れるもの數知れず尙も進撃以て之を織滅せんと第一線に立ち奮戰中不幸一彈は顔面に命中し名譽の戰死を遂げらる……(後略)

九月二十六日 田上部隊宮原部隊  
宮原敏雄





故陸軍砲兵上等兵

平林 秀夫君

大森區大森九丁目

四、四四〇番地

一、大正四年五月十八日生

一、昭和十一年五月滿洲國派遣軍として渡滿爾來滿一ケ年間匪賊討伐、國境警備等に從事し焦熱と闘ひ遂に悪疫に冒され、昭和十二年八月内地歸還を命ぜられ第二陸軍病院にて療養中なりしも同年十一月二十四日遂に永眠す君も亦友邦滿洲國建國の礎、皇國の華なり。



故陸軍輜重兵特務一等兵

指田 滋二郎君

大森區池上徳持町

三六七

一、明治四十一年三月七日生

昭和十二年九月八日、今次專變に際し佐々木部隊に充員召集、九月二十三日上海上陸以來軍務に執掌せられ十月五日より十五日迄陸軍の最も苦戦辛酸を嘗められたる第一回蘊藻クリークの大激戦に勇躍奮戦中十月九日不幸、大腿部貫通銃創を受け野戦病院に入院加療中十一月十五日遂に逝去せらる。



故陸軍輜重兵特務一等兵

手島 藤吉君

大森區入新井

四ノ五三

一、明治四十二年一月十五日生

一、昭和十二年八月二日專變により野戦重砲兵第三聯隊岸山部隊に充員召集、北支戦線に参加、豐臺の戦鬪より第一線に立ち九月涿州保定の會戦並石家莊、滏陽河附近の會戦に参加連戦連勝の勢を以て南下十一月三日明治節の佳晨には平定城外にて天皇陛下の萬歳を三唱し戦友と冷酒を汲合ひ野宴を張りしが十一月五日重大任務を帯て太原に向ひ前進中平定縣辛興鎮東方地區に於て突然有力なる敵の襲撃を受けたり。君は敢然迎撃して之と應戦すること二時間薄暮に及ぶ。月將に出でんとする頃不幸敵機關銃の一弾は君が胸部を通し遂に壯烈なる戦死を遂げらる。



故陸軍歩兵少佐

安田 龍三君

從六位勳六等

大森區雪ヶ谷町七一

一、明治四十二年八月二十三日生

一、昭和五年七月、陸軍士官學校卒業  
一、同十二年八月十九日今次專變に際し倉光部隊に屬し出動、中隊長たり。  
八月二十三日吳淞に敵前上陸、進撃上海に肉迫、九月二十三日には頑強なる敵を撃滅、上海市政府を完全に占據以て皇軍の武威を宣揚し、更に各地に轉戦、十月四日四圍兒に於て大場鎮攻撃に移らんとし同月七日の戦鬪に於て左大腿部骨折貫通銃創を受け涙を呑んで吳淞野戦病院に收容せられ同月十四日遂に逝去せらる。





故陸軍歩兵軍曹

赤塚庄四郎君

大森區大森四ノ九四

一、明治四十年六月七日生

戦歴

昭和十二年九月四日福井部隊に充員召集、同月二十七日大家宅に到着、翌日二十八日より堅固なる敵陣地攻撃に當り敵前壕掘、決死突撃を敢行し遂に須宅陣地を完全に占據、皇軍の武威を宣揚せり、越えて十月十三日午前一時江蘇省寶山縣西部委家橋附近の戦闘に於て遂に名譽の戦死を遂げらる。



故陸軍歩兵伍長

菅田富雄君

大森區馬込町西一ノ

一、六六七

一、明治四十年六月二十五日生

一、昭和十二年九月十四日近衛歩兵第四聯隊に充員召集、集皆部隊に屬す。

勇躍して渡支、上陸以來上海攻略に勇戦奮闘克く皇軍の武威を宣揚しつゝ進撃、十月二十三日大場鎮總攻撃に於て敵彈雨飛の中を物ともせず勇猛果敢なる奮闘中上原隊長先づ倒れ間もなく一彈亦來つて君の大腿部を貫通す。直に顯家宅の野戦病院に收容され手當の甲斐もなく「無念！」の一聲を残して上原隊長と共に永眠さる、惜可。



故陸軍歩兵伍長

大久保俊幸君

大森區調布鶴木町四一

一、明治四十年七月二日生

戦歴

一、昭和十二年九月七日津田部隊に充員召集、九月二十二日吳淞鎮に敵前上陸以來破竹の勢を以て抗日のトーチカ、毎日のクリークに連日苦戦激闘を續け、同二十七日揚家沿の戦闘に於て我に數倍せる敵の包圍攻撃を受け之を織滅し歴倒的勝利を博し續いて江家宅を占據、遂に敵を蘆藻濱クリークの右岸に壓迫す。かくして十月六日午前四時君の屬せる中隊は大隊の第一線となり全員決死の勢を以て敵の重機、砲彈の炸烈する中を渡河前進、鐵條網を破り、所命の一角を占據、尙奮闘中、肩、胸部、頭、臀部等に數彈を受け、病院船パシヒツク丸に收容加療を受けしも遂に立たず。時に昭和十二年十月二十三日。



故陸軍歩兵上等兵

近藤茂君

大森區新井宿  
七ノ九二

一、明治四十四年四月十二日生

戦歴

昭和十二年九月九日津田部隊に充員召集、同十八日渡支、二十二日吳淞砲臺上陸、同二十六日より最前線に出動、越えて十月八日午後四時蘆藻濱クリークの敵前渡河の激戦に於て勇戦奮闘中遂に敵彈に墜る。





故陸軍砲兵上等兵

柴田權太郎君

大森區大森

六ノ二、八六三

一、明治四十年一月十日生

戦歴

一、昭和十二年八月二十一日野戰重砲兵第一聯隊長屋部隊に充員召集、勇躍渡支吳淞鎮の敵前上陸軍に加はる。爾來勇猛果敢に進撃又追撃炎天下に堅固なる陣地に據れる敵を撃破しつゝ各地に轉戦すること滿二ヶ月其戦功見るべきものありしも惜可し、月浦鎮附近の戦闘に於て遂に名譽の戦死を遂げらる。



故陸軍々醫大尉正七位

荒城謙之君

大森區市野倉町

六六番地

一、明治四十三年五月二十四日生

戦歴

一、明治十一年三月東京帝國大學醫學部醫學科卒業、同年十二月近衛歩兵第四聯隊短期軍醫候補生トシテ入營。昭和十二年八月二十五日事變ニヨリ加納部隊付ニ補セラレ同九月十七日出動  
昭和十二年九月二十四日上海上陸以來進撃に進撃を以て十月四日第一線部隊となり前線よりの還送將士の看護治療に専念せられ同月十日加納部隊長より假纏帶所の設置を命ぜられ翌十一日之が完了の旨部隊長に報告小宅西北側百五十米の地點の戦闘に於て迫撃砲により右大腿骨折、首貫銃創及胸部貫通銃創を受けられ負傷手當の甲斐なく戦死せらる。従軍中は傷者より慈父の如く救世主の如く慕はれし君遂に起たず、可惜。



故陸軍歩兵伍長

片山周・藏君

大森區雪ヶ谷町

二五九番地

一、明治四十三年一月二日生

一、昭和六年一月十日、歩兵第一聯隊入營

翌七年七月歸休、命上等兵

一、昭和十二年九月應召、加納部隊ニ屬ス

戦歴

上海上陸以來勤務に戦闘に率先躬行、其行動實に軍人の龜鑑とするものありしに十月六日江蘇省小宅附近の激戦に於て攻撃に突撃に奮闘中腹部に貫通銃創を受け遂に名譽の戦死を遂げらる、同日歩兵伍長に任ぜらる。



故陸軍歩兵伍長

鈴木庄次郎君

大森區調布嶺町

一ノ五一六番地

一、大正六年二月五日生

一、昭和九年十一月現役志願トシテ渡滿、川岸部隊ニ入隊、十二年三月歸還除隊

一、昭和十二年十月應召、飯塚部隊ニ屬ス

一、昭和十二年十月應召、飯塚部隊ニ屬ス

戦歴

十月十九日上海上陸後進撃に次ぐに進撃、常に敵前百米に接近對戦すること幾度、同月二十六日、旅團の豫備隊として午後一時附近の森林に集結中敵斥候より猛烈なる射撃を受け是に應戦中背部貫通銃創を受けられ應急手當を受けたるも同日午後七時遂に名譽の戦死を遂げられたり。





放陸軍砲兵伍長

田中與四郎君

大森區大森

一ノ四二〇番地

一、明治三十六年十一月二十六日生

一、大正十三年一月十日現役トシテ野戦重砲兵

第一聯隊入營

一、昭和十二年八月十四日應召、野戦重砲兵第

一聯隊長屋部隊ニ屬ス

戦歴

上海戦線各地に轉戦、砲兵隊任務を遺憾なく發揮皇軍の武威を發揚しつゝありしが十月三十一日中華民國蘇洲河附近の戦闘に於て不幸敵砲彈破片創を受け、第九師團第三野戦病院に收容加療手当を受けしも經過良好ならず同日午後十一時戦傷死せらる。



放陸軍歩兵上等兵

藏方喜伴君

大森區堤方町六一三

一、明治三十五年十二月十日生

一、大正十一年一月十日歩兵第一聯隊ニ入營同十二年十一月除隊、其後ハ青物仲買商ヲ營ム

一、昭和十二年九月應召、加納部隊ニ屬ス

戦歴

昭和十二年九月二十四日上海北方に上陸以來敵の塹壕クリークの錯綜せる幾多の堅陣を踏破十月二日最も堅固なる蘆藻濱クリークの前方に到着、穩密渡河を企圖するも果さず、部隊長は決死強行渡河の決意するの止むなきに至り彈丸雨飛の中鐵舟に飛乗り對岸に達し壯烈なる肉弾戦の結果敵陣の一角を奪取、幾多の反撃と逆襲とを打破る、君は常に第一小隊第三分隊長を輔佐し十月六日早曉、曹宅に於ける敵陣地奪取の突撃命令下るや、敢然敵陣目がけて突進、將に鐵舟に飛乗らんとせし時敵彈頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂げらる



放陸軍歩兵上等兵

鳴島信吉君

大森區大森九丁目

四、五三〇

一、明治四十一年二月十六日生

一、大正十五年一月歩兵第一聯隊ニ入營

昭和二年十一月除隊、以後乾海苔製造業經營

一、昭和十二年九月應召、加納部隊ニ屬ス

戦歴

昭和十二年九月二十二日上海上陸以來各地に轉戦、皇軍の威武を遺憾なく發揮、進撃又進撃を続け十月七日曹宅附近の攻撃戦に於てはクリークと點在せる家屋等を利用して我軍を腦す猛烈なる敵の反撃を物ともせず蘆藻吳クリークを渡河、直ちに攻撃に移りたるも降雨泥濘のため全く身の自由を失ひ、加ふるに兵糧彈藥は缺乏し武器又使用に堪へず肉弾戦以外に採るべき手段なく全員勇猛果敢なる突撃を敢行敵前約八十米の地點に達せし頃不幸敵彈は遂に君が頭部を貫通し遂に名譽の戦死を遂ぐ、時に十月十九日午前六時なり。



放陸軍歩兵上等兵

久保田稔君

大森區大森二丁目一四四

一、明治四十一年三月十五日生

一、昭和四年一月歩兵第一聯隊、翌五年十一月除隊

一、昭和十二年九月事變ニ依リ召集加納部隊ニ屬ス

戦歴

昭和十二年九月十六日暴支膺懲のため勇躍出發、同月二十七日上海上陸以來各地に轉戦皇軍武威を宣揚中なりしが、十月十八日小宅西方附近の戦闘に於て胸部を貫通され遂に名譽の戦死を遂げらる。





故陸軍歩兵上等兵

田中 五藏君

大森區大森

一ノ三二一番地

- 一、明治三十八年七月十一日生
- 一、大正十五年一月歩兵第一聯隊ニ入營、昭和二年十一月除隊、爾後大森分會組長防護團役員其他公共組合役員トナル
- 一、昭和十二年九月應召、加納部隊ニ屬ス

戦歴

昭和十二年九月二十四日上海上陸以來敵塹壕クリークの錯綜せる幾多の堅陣を踏破、十月二日最堅陣たる蘆藻濱クリークに到達、穩密渡河を企圖するも果さず、即ち加納部隊長より強行渡河の命を受けたる所屬溝松隊は強雨の中を鐵舟に依り對岸に達し壯烈なる肉彈戰の結果敵壘の一角を奪取一番乗の榮冠を擔ひたり、此間クリークは連日の豪雨の爲氾濫し泥濘膝を没し前進

意の如くならず武器は用をなさず、肉彈戰を唯一の武器とし幾多の逆襲を反撃さしもの堅陣も全く我が勇敢なる將士の手歸したり、君は第二小隊第一分隊にあり常に分隊長を補佐しよく軍の先頭に立ち隊員を激勵せり。十月十三日曹宅に於て再度強行渡河後更に前進準備中敵彈、顰頂部に貫通し其場に轉倒せるも氣丈な君は再び銃を執り發砲せしも遂に倒れて起つ能はず野戰病院に收容され同月十七日遂に名譽の戰死す。



故陸軍歩兵上等兵

服部 兼光君

大森區馬込町東四丁目

四三〇八番地

- 一、明治三十七年八月八日生
- 一、大正十三年一月歩兵第六十八聯隊ニ入營
- 一、昭和三年五月ヨリ十一月マダ濟南事變ニ出動
- 一、昭和十二年九月應召、加納部隊ニ屬ス

戦歴

昭和十二年九月二十四日上海上陸以來進撃を續け十月五日吳淞クリークを強行渡河し前面の小宅及曹宅の敵陣地を奪取すべき命を受け所屬藤崎隊は右翼隊として彈丸雨飛の中を物ともせず午前八時敵陣地の一角を占據せしも多數を頼む敵は新手を代へて逆襲に逆襲を以てし味方は泥濘膝を没する塹壕内にありて行動思ひのまゝならず命と頼む武器は泥水入りて用をなさず。藤澤隊長の命に依り突撃以て敵を撃退せんとし際敵彈胸部を貫通し遂に名譽の戰死を遂げらる、時に十月七日午前五時十分なり。



故陸軍工兵上等兵

野口 阿久太郎君

大森區大森九丁目

四、一七二番地

- 一、明治四十一年十一月十三日生
- 一、昭和三年一月工兵第一大隊入營
- 同四年十一月除隊
- 一、昭和十二年十月應召、小金澤部隊ニ屬ス

戦歴

昭和十二年十一月十日杭州灣上陸以來、未開の水路に晝夜の別なく風雨を昌し食糧の缺乏等總ての困難を忍び第一線部隊に要する彈藥糧食の水陸輸送に部隊の渡河に亦還送患者の輸送等に活躍中、十二月十三日午前八時第一線國崎支隊彈藥補給の命は所屬藤原中隊に下る。即ち機舟十四隻に分乗各彈藥を脊負ひ長路に向ひて急行す。やがて午後三時三十分頃洛陽湖畔大龍口北端附近陸岸を離る、約四十米の地點を航行中突如機銃小銃、手榴彈を有する約四百の敵より猛射を受けたるに依り全軍直に應戰奮闘中隊長初め大部分の犠牲者を出したり。君も亦此戰闘に於て遂に名譽の戰死を遂げらる。





故陸軍輜重兵一等兵  
**萩原勝三君**  
大森區四丁目二番地  
築山新之助方

- 一、大正四年九月二十三日生
- 一、昭和四年四月ヨリ同十二年九月迄前記築山洋装店ニ勤務
- 一、同年九月應召、佐々木部隊ニ屬ス

戦歴

昭和十二年九月二十一日上海上陸以來、連日の降雨に泥濘車軸を没する道路に馬を馴しよく其任務を遂行せり、温藻吳クリークの渡河戦に於て君が所屬部隊も第一線部隊に隨行し前進すべく命を受け砲烟彈雨下に道路偵察に先行し能く部隊を誘導十月九日敵前千米の新宅に於て作業中飛來せる敵彈君が後頭部に命中、手當の効なく十二日午後五時戦死す。



故陸軍輜重兵特務一等兵  
**岡六郎君**  
大森區馬込町東一丁目  
一、四一八

- 一、明治三十六年十二月十七日生
- 一、大正十年三月大倉高等商業學校卒業
- 一、大正十一年十二月輜重兵第一大隊入營
- 昭和十二年九月マデ王子製紙株式會社勤務
- 一、昭和十二年九月應召第一師團司令部付トナル

戦歴

昭和十二年九月五日渡支、各地に進撃良く皇軍の威武を宣揚しつゝ軍務に勉勵中不幸病魔に冒され十一月二十八日遂に戦病死を遂げらる。



故陸軍歩兵中佐  
正六位勳五等  
**辻文喜君**  
大森區出園調布二丁目  
九七〇番地

- 一、明治二十年一月八日生
- 一、明治三十八年十二月陸軍士官學校入校
- 一、明治四十年十二月任陸軍歩兵少尉
- 一、大正十三年十二月任陸軍歩兵少佐、豫備役仰付ラレ爾後、庶民金庫、産業組合ニ盡瘁
- 一、昭和十二年九月應召、添田部隊ニ屬シ第三大隊長ヲ命ゼラル

戦歴

昭和十二年十月二日上海上陸月浦鎮を経て察寧宅東南方に兵力を集結、同月二十一日清水願の敵陣奪取の命を受け作戦行動に依り午後九時半頃目的地に到着、終夜對壕作業を續け遂次敵に接近、交戦續行二十三日に至る、愈々翌二十四日午前砲兵と協力し敵陣地を猛

攻すれども敵亦頑強に抵抗して戦果意の如くならず遂に夜に入り敵の逆襲、夜襲を撃退しつゝ夜を徹す明くれば二十五日なり、此日愈々一大決心を以て再び味方砲兵の協力を得て敵陣に肉迫、煙幕の下に鐵條網を破壊し突撃路をひらきいよゝ敵に迫り機熟するを待ち第一戦部隊をして突撃喇叭勇ましく猛烈果敢な突撃を敢行す。此時猛家宅南側及清水願南側の敵は猛然として我一線突撃部隊に砲火を浴せ來り偽に我第九、十中隊長共に重傷を負ふ、辻中佐は益々沈着に部下を激勵、双眼鏡に依り正面の敵情を視察作戦指揮中、花家搏宅の敵陣地より飛來せる一彈左頬部より後頭部に貫通し遂に名譽の戦死を遂げらる。時に十月二十五日午後零時三十分なり。

辻中佐は常に謹嚴にして率先躬行克く範を垂れ上帥の信任極めて厚く部下を愛すること慈母の赤子に於けるが如く部隊兵一同の敬仰情く能はず、部隊一人の如き統制は他の範とするに足ると、以て中佐の爲人を知るべし。





故陸軍歩兵中尉  
從七位勳七等

白井政次君

大森區雪ヶ谷町  
一、三四二番地

- 一、明治三十年八月二日生
- 一、大正四年十二月歩兵第六十五聯隊ニ現役志願兵トシテ入隊
- 一、昭和六年二月任歩兵少尉、敘正八位、豫備役仰付ラル
- 一、昭和七年四月ヨリ同十二年九月マデ白木屋青年訓練所及青年學校指導員トナリ
- 一、昭和十二年九月應召、兩角部隊ニ屬ス

戰歴

昭和十二年十月十日上海上陸以來各地に轉戦す。就中四月十六日老陸宅附近の猛攻撃に参加し歩兵の本領を遺憾なく發揮すべき重火器たる機關銃小隊長として活躍せられ其目醒しき奮闘振は隊員崇敬の所なり。同月二十日午後四時三十分頃陣地變換のため猛射を冒し陣地偵察中遂に肩及胸部に貫通銃創を受けられ直に第九師團野戰病院に收容同月二十二日より吳淞野戰病院にて手當加療中、二十四日午後六時十五分遂に名譽の戰傷死を遂げられたり。



故陸軍歩兵軍曹

水巻潔君

大森區大森五丁目  
五六番地

- 一、大正元年十一月十八日生
- 一、昭和七年四月ヨリ區内大森二丁目長谷川製糖燒酎店ニ勤務、昭和十二年二月獨立營業ス
- 一、昭和八年一月歩兵第三十五聯隊ニ入營伍長勤務上等兵トナル
- 一、昭和十二年九月應召、藤井部隊ニ屬ス

戰歴

上海方面上陸以來各地に轉戦、十二月六日甬世追撃に際し行動困難なる山野を跋涉し除鹽附近の山地利用の堅壘を奪取、更に敗退する敵を急追、九日午前十一時頃重火器を有する約四十名の敵を撃破し同日午後二時南京城外の敵主陣地前に進出すると共に小隊長の意圖に従ひ勇敢に攻撃を續行し克く任務を遂行せり戰果の擴大と共に益々進撃、十一日午後三時敵前六十米に於て突撃を敢行敵の第一線陣地に躍り込み劍道初段の凄腕を以て白兵戦の後完全に之を占領、尙進んで第二陣地を奪取更に敵を急追中を陰囊貫銃創を受け手當受けしも遂に十四日に名譽の死を遂げらる。



故陸軍砲兵伍長

鷓飼照彦君

大森區田園調布二丁目  
八三八番地

- 一、大正三年十月二十四日生
- 一、昭和八年四月日本大學專門部機械科卒業
- 一、昭和五年五月以降グライダー術ノ研究ニ從事、帝國飛行協會ヨリ一級グライダー飛行證ヲ受ケ東京朝日新聞社グライダー部指導教官ヲ囑託サル
- 一、昭和十二年三月滿洲獨立守備歩兵第二十八大隊入營、同年六月第十二聯隊ニ轉屬幹部候補生ニ採用サル

戰歴

昭和十二年六月以降張家口に駐屯し廣靈、察哈爾省及び蔚縣附近の共産軍を討伐し應縣の警備に就けり。其後君の所屬中隊は大同に集結の命を受け昭和十三年

一月六日寒風肌を刺す零下二十六度の午前六時應縣を出發、積雪を踏む十二里の強行軍の後大同に到着、翌七日よりは零下正に三十度の酷寒の中において同地の警備に服し斥候長として或は衛兵上等兵として陣務に従事す其間常に率先躬行衆の模範として上下の信望を受く。越えて二月十日一部の出動を命ぜられたれど君は留りて連續勤務することとなり同日より大同飛行場の警備に當る。夜毎に烽火を上げて來襲する敵兵又は出沒する便衣隊を撃退する等其活動振りは目覺ましく賞讃の的たりしに二十六日午後俄に發熱、頭痛を訴ふるに至り同地野戰病院に收容一意加療に勉めたるも其効なく翌二十七日午前十時遂に陣没せらる。





故陸軍砲兵伍長  
鈴木正治君  
大森區石川町  
二〇二番地

- 一、明治四十四年九月二十日生
- 一、昭和七年一月十日野戰重砲第二聯隊に入營
- 一、昭和十二年八月マデ鐵道省大井工場ニ勤務

戰歴

昭和十二年八月二日應召、木下部隊に屬す、同月十日渡步、十一月初旬黄河作戰の爲移動前進中、同月十二日午後五時山東省臨邑に於て糧秣受領の勤務に従事し發病、野戰病院に收容され其後十二月八日臨邑患者療養所に於て一意加療に勉ぬたるも急性腹膜炎を併發し心臟衰弱の爲遂に同月九日午後零時三十分名譽の戰病死を遂げらる。



故陸軍輜重兵上等兵  
勳八等  
山名恒義君  
大森區堤方町一四六

- 一、明治四十三年九月二十九日生
- 一、昭和五年二月輜重兵第九大隊に入營、同七年二月上海事變ニ出動功ニ依り勳八等ニ叙セラレ
- 一、昭和八年六月ヨリ中央工業株式會社ニ勤務
- 一、昭和十二年九月應召、西島部隊ニ屬ス

戰歴

昭和十二年九月二十八日上海上陸以來未開未踏の地に泥濘膝をも没する惡路に良く輜重隊の任務を遂行皇軍の輝しき戰果を收めしむるに擧つて力あり、十一月八日陰家橋なる大隊本部第三班長代理として第一線に糧秣輸送の重任を帯びて之を遂行し歸途、倪家橋附近に達したる時敵砲兵陣地よりの重砲彈の爲後頭部を粉砕し名譽の戰死を遂げらる時に午後四時なり。



故陸軍歩兵上等兵  
星野登君  
大森區調布  
鷗木町七一番地

- 一、明治三十七年一月二十一日生
- 一、大正十三年一月十日歩兵第三十聯隊に入營、翌十四年十一月除隊
- 一、昭和六年四月十五日前記住所にてパン製造販賣業經營

戰歴

昭和十二年九月十七日添田部隊に應召、暴支膺懲の率戰に勇躍渡支、未開未踏の北支戰線に活躍、赫々たる武勳を建て津浦線北進の大追擊戰にも元氣旺盛に進撃せられた。全君は此度の追擊中常に江陰砲台の攻撃に名譽の戰死を遂げられた實兄彌吉郎氏の遺骨を背囊中に負ひつゝ、兄の仇敵擊滅を念じ常に軍の先頭に立つて勇戦奮闘されたものであつた。明光北側五里亭の敵に突撃の際は彈丸雨飛の胸膺上を敢然突入白兵戰に移り敵を掃蕩中敵彈の爲に胸部を貫通され遂に名譽の戰死を遂げらる。

時に昭和十三年一月二十九日なり。

(別項参照)



故陸軍衛生兵伍長  
水本守雄君  
大森區入新井  
三丁目一七番地

- 一、明治四十二年八月八日生
- 一、昭和二年五月前記場所にて電氣器具商經營
- 一、昭和四年十二月陸軍衛戍病院在營

戰歴

昭和十二年八月九日應召、伊東部隊、山川隊に所屬越えて十七日渡支、上海上陸後直ちに市政府附近に開設されたる病院に入り自ら進んで傳染病々棟付を志願し、嘉定に於ては傳染病患者を背負ひ後送する等君が献身的努力は患者は勿論隊員一同の崇敬の的たりしに昭和十三年三月十五日揚子江北岸地區に向ひ敵前上陸の命を受け是が出動準備中自動車事故により傷病を受けられ上海第二兵站病院に於て加療に勉めたるも經過良好ならず、同月二十三日遂に名譽の公傷死を遂げらる。





故陸軍歩兵中尉從七位

渡邊龍三郎君

大森區雪ヶ谷町  
三〇番地

- 一、明治三十七年七月十九日生
- 一、昭和四年三月 慶應義塾大學卒業
- 一、昭和四年四月以降諸會社支配人、重役に歴任

戦歴

昭和十二年九月十一日 公林部隊に充員召集され第一二大隊小隊長として各地に轉戦皇軍の威武を官揚したり。

十月十八日午後十一時、新木橋附近の敵陣地を占領すべき大隊長命令を受けたる君の所屬中隊は十九日午前零時三十分第二第三小隊を第一線、渡邊少尉の第一小隊を豫備隊として敵彈雨飛の中を敵前百米の地點に陣地を占領し二十一日早朝迄不眠不休にて第一線小隊は突撃陣地を、第二線の渡邊小隊は交通壕を各構築に

専念し時の來るのを待つ。

新木橋は過去十年來蔣介石中央直系軍の演習地として使用せし爲最も堅固に構築され空爆に對する防禦の如きは實に完璧に近き状態なり。

二十一日午前八時より我軍は此堅壘に向つて攻撃を開始せり。即ち友軍の荒鷲の爆撃と砲兵の集中射撃の中に逐次敵に接近、午后零時三十分突撃に移り肉弾戰に次ぐに肉弾戰を以てし之を占領せしが渡邊少尉は突撃と同時に小隊の先頭に立ちて小隊を率い猛進躍進、敵塹壕内に突入第一戰の敵兵と格闘中狙撃兵の拳銃の爲惜くも胸部を貫通され遂に名譽の戦死を遂げられ同日陸軍歩兵中尉に任ぜらる。



故陸軍歩兵伍長

鈴木松之助君

大森區池上德持町  
三七三番地

- 一、明治三十七年三月三日生
- 一、大正八年四月上京、品川町朝日屋飲食店に勤務
- 一、大正十三年一月 仙臺歩兵第四聯隊に入營
- 一、昭和七年六月以降前記の場所にて飲食店經營

戦歴

昭和十二年九月田代部隊に充員召集、十月一日上海上陸以來、未開未踏の地につぶさに辛苦を嘗め各地に轉戦し遂に十月二十二日上海戦線三家村附近の戦闘に於て名譽の戦死を遂げらる、悲しくも亦勇ましい哉。

大場鎮攻略の前哨戰たる三家村に於ける戦闘は十月二十日の第一回總攻撃を以て開始し翌二十一日第二回を敢行するも敵は蔣介石の誇る軍官學校の精銳、加ふるにクリーク、トーチカの堅壘に據り其抵抗は頑強にして戦果意の如くならず戦死傷者續出し分隊長亦戦傷

を受け後送せらる。依つて君は分隊長代理を命ぜられ

勇躍奮闘、翌二十二日第三回の總攻撃には幾多の難關を突破肉弾戰につぐに肉弾戰を以て敵前十米に近迫將に敵中に突入せんとせし一瞬敵彈君が胸部を貫通し遂に名譽の戦死を遂げらる。時に午前二時なりしと、

君は勤務に戦闘に常に卒先躬行第一線に立ち滅私奉公の權化の如き奮闘は上下の信望厚かりしと聞く。

又君の未亡人の奮闘振りは銃後の佳話として近隣の賞するところ 本書別項に掲載せり。





故陸軍歩兵伍長

坂詰 勝君

大森區新井宿三丁目

一、三六三番地

- 一、明治四十年三月十八日生
- 一、大正十三年月二十日 荏原中學卒業
- 一、昭和三年一月歩兵第三十聯隊入營
- 一、昭和十二年九月三十日遼東軍聯合少年團東京中央青年健兒團指導員、株式會社昭和製作所取締役等に歴任

戦歴

昭和十二年十月五日倉林部隊に充員召集

上海方面上陸以來、各地に轉戦苦闘を重ね下士勤務上等兵として幾多の戦功を立てたりしが十一月三十日君の屬する中隊は夜襲により江陰砲臺を距る八軒の地點にある花山の敵陣地を占據、中隊は其地に裝具の運搬に移動することとなり、君は兵三名と下士哨長として之に居残り中隊長亦從卒と占領地區に止まれり。

此を見たる殘敵約八十名は突如逆襲し來り其勢あなどるべからず、我兵二名忽ち敵彈を受けて重傷せしも君は單身機關銃を以て反撃大いに努め敵三十を斃し克く占領陣地を死守するを得たり。かくて漸く中隊の近づくを見て是と連絡せんとせし時敵彈左頸部より右胸部に貫通脊髓損傷の爲全身不隨となれり。一月四日還送、廣島陸軍病院に於て銳意加療に努めたるも昭和十三年四月十八日遂に名譽の戦傷死を遂げられたり。



故陸軍歩兵上等兵

久保田辰美君

大森區北千束町

四九九番地

- 一、大正五年八月四日生
- 一、昭和十一年五月一日 自動車運轉手免許
- 一、全 十二年一月 歩兵第三十四聯隊入營

戦歴

久保田君は現役として歩兵第三十四聯隊在隊中事變により田上部隊に屬し勇躍渡支九日上海吳淞に上陸以來、揚行鎮の堅壘を初めとして十月一日には敵の重要防禦幹線たる劉家行を攻略、續いて大場鎮の堅陣を奪取、進撃に次ぐに追撃を以て蘇州河の肉彈的渡河を敢行せり。かくて對岸石灰工場に陣地を構築中、敵の一彈飛び來つて君が胸部を穿透す。後送され上海兵站病院に收客銳意加療に勉めたるも經過良好ならず遂に十二月二十日名譽の戦傷死を遂げられたり。



名譽の  
戦傷者



大森區出身戰傷疾病將兵調

大森三ノ一四 栗田誠司君 上海四川路附近  
 同 一ノ三六 田中寅吉君 上海附近  
 同 三ノ五西村方 出川虎之輔君  
 同 四ノ六 植木茂君 金家屯  
 同 一ノ二五 宮崎榮吉君 上海方面  
 同 七ノ五 清水平八郎君  
 同 六ノ三、〇五 平林源藏君  
 同 八ノ五、〇七 小坂三之助君 於永定河附近  
 同 九ノ四、八一 平林一郎君  
 入新井四ノ五 土屋茂君 北平附近  
 同 四ノ五 金子武雄君  
 同 一ノ一、〇三 平岩孝太郎君 上海方面  
 新井宿五ノ二 大野三郎君 公主嶺附近  
 同 六ノ六九 吉江政雄君  
 同 四ノ一、二七 平林伊佐三君 上海方面  
 同 五ノ三〇 西山清君 同

同 五ノ五三 大谷西造君 同  
 山王三ノ二六 各務重久君 金家屯(死)  
 馬込町東三ノ八 大島末吉君 寶家宅  
 同 東一ノ二〇 關根愛次君  
 南千束町三 小原甚吾君 (上海附近)  
 石川町二 竹井治君 天津附近  
 池上徳持町四 町田文藏君 上海附近  
 同 四〇 指田滋二郎君 (死)  
 同 三三 田中松之助君  
 田園調布一ノ一 森岡正雄君 王家宅附近  
 大森區役所 山本四郎君  
 大森一ノ二五 石井豊作君 (上海附近)  
 雪ヶ谷町三元 齋藤利一君  
 田園調布三ノ六 岩瀬利治君 (保定附近)  
 同 四ノ二五 落合直次郎君 上海附近  
 調布嶺町一ノ三 鈴木友一君 同



雪ヶ谷町一〇元 柳下末一君 (南京)  
 入新井六ノ二五 矢向大徳君 (長家屯)  
 堤方町三三 戸張均君 (曹宅)  
 馬込町東三ノ七五 波田野正雄君 (上海附近)  
 同 四ノ八四 林良仁君 (北支)  
 同西一ノ一四七 久保井正雄君  
 同 東四ノ四六 渡邊善尙君  
 南千束町二六 岸田政光君  
 入新井四ノ二六 重富信雄君  
 調布嶺町一ノ三六 鈴木利文君 (上海附近)  
 入新井二ノ二五 田申遠吉君 (同)  
 大森三ノ三〇 草刈富太郎君 (蘇州河)  
 森ヶ崎五ノ八元 小野贊之輔君 (上海附近)  
 大森八ノ四〇六 森谷榮太郎君 (同)  
 田園調布二ノ八四 上田正一君 (同)  
 雪ヶ谷町一、二天 岩下周二君 (同)  
 大森八ノ三、七六 平林正法君  
 新井宿四ノ一、二五 坂瓜常雄君

大森七ノ元〇 落合三之助君 (上海附近)  
 新井宿五ノ二二 大野二郎君 (孔家庄附近)  
 大森九ノ四、五三 酒井與四郎君 (上海附近)  
 同 九ノ四、二九 平林銚雄君 (同)  
 同 九ノ四、七三 柴田逸亮君 (同)  
 同 三ノ三三 杉山茂君 (峰縣々城)  
 馬込町西一ノ二六 山崎条三郎君  
 大森一ノ二五 久保常義君  
 馬込町東四ノ九 横山已江吉君  
 新井宿六ノ四四 廣瀬興君 (蘇州河)  
 入新井二ノ二五 守屋林藏君  
 新井宿一ノ一、七九 麻田太郎君 (上海附近)  
 馬込町東二ノ一〇五 藤織之助君 (安城縣)  
 大森三ノ三三 森田宇喜知君 (大場鎮)  
 雪ヶ谷町五四 小島榮君 (上海附近)  
 大森八ノ三、五九 香取利重君 (大場鎮)  
 馬込町東四ノ三三 山崎秀雄君 (上海附近)  
 山崎清作方  
 北千束町五九 高木芳雄君 (上海附近)

同 三五 鈴木弘君 (上海附近)  
 馬込町西四ノ二、九羽 生田一雄君 (同)  
 同 東四ノ三三 重松鐵二君 (同)  
 大森五ノ五、水卷方林 武雄君 (同)  
 大森三ノ二八 杉山輝資君 (同)  
 上池上町八渡邊方 渡邊徳治君 (同)  
 雪ヶ谷町六二 近藤政一君 (南京)  
 池上徳持町一 村上光信君 (蘇州河)  
 入新井四ノ二七 神尾健太郎君 (上海)  
 同 三ノ三〇 平林市太郎君 (同)  
 大森三ノ三三 小池一孝君 (湖州)  
 南千束町三三 久納三次郎君 (南京)  
 山王一ノ二、七五 猪谷甫君  
 馬込町東二ノ九二 羽鳥正君  
 馬込町三ノ八四 境野茂方 今野元司君 (南京)  
 入新井四ノ四九 上原定君 (北支)  
 北千束町三六 木田善雄君 (上海附近)  
 北千束町五三 柳澤幸吉君 (北支)

同 四九 山本健次郎君 (上海附近)  
 大森三ノ三三 河合条八君  
 北千束町七四 中村恒司君  
 新井宿七ノ八 北尾淳次郎君



## 中島重榮君

東調布警察署勤務巡查

中島君は豫備歩兵一等兵にして昭和十二年九月九日應召、上海戦線に活躍中、右肩首貫傷を負ひ名譽の戦傷者として第十三師團野戦病院に收容せられ後第一陸軍病院に移り、目下千葉陸軍病院に於て療養中なり。

(東調布署寄)

## 野口久一君

東調布警察署勤務巡查

野口君は後備歩兵軍曹にして昭和十二年八月二十五日應召、上海派遣軍に加はり、昭和十二年十一月一日〇〇より〇〇に到る軍用自動車にて輸送任務中、左指關節部に深さ骨膜に達する重傷を負ひ一月十六日東京歸還、第一陸軍病院に移り、更に一月二十二日熱海陸軍病院に移送せられ目下療養中であり。

(東調布署寄)

## 山本四郎君

大森區役所社會課勤務

山本君は現役兵として昭和十二年一月十日歩兵第三聯隊に入營。一月二十六日勇躍渡滿以來軍務に精勵中北支事變の勃發と共に直ちに北支戦線に加はり勇戦奮闘つぶさに艱苦を嘗め七月二十九日以来二ヶ月の間中隊長附として常に先頭に立つて幾多の戦功を立てた。

所が不幸進軍中敵地雷の爲名譽の負傷を受け遂に野戦病院に收容され、今東京の陸軍病院にあつて靜かに療養する身となつた。

左記は同君が當時野戦病院から上司の社會課長に宛てた手紙だが左手の三指を失ひ再び戦線に立つ望みを絶ちながら死も尙歸するがときスポーツの明朗さを持つ點君の面目の一面を見ることが出来る。

拜啓：前略……山本も七月二十日以来北支事變に參加致して居ります。

天津に、南祭村里に、開平へ、二千三千の保安隊と戦

ひ又も天津に―そして一日休んで直ちに熱河へ。熱河省から自動車五十四臺に分乗して内蒙古を経て張北へ入城致しました。百三十里、二日間の自動車行軍にはさすがの關東健兒もフラ／＼になりました。然も休む暇もなく翌十八日は敵地四里に踏み入つての地形調査そこで敵に發見されて包圍されました。敵は二中隊、味方は二個分隊、苦戦中小幡隊の一ヶ中隊に助けられて散々に敵を蹴散しました。それから二十八日迄といふものは一日に四回も闘つたことが二三度、而も朝から晩迄戦ひ続けながら水瓜、乾、パン等を食ひました。聯隊を離れて大隊だけ、野砲も、砲兵の援助もなく小銃だけで戦闘し、前進する苦戦は筆舌には盡せません三四萬の敵を打破つて張家口に入城した時に自分の中隊でも戦死者五名負傷者十一名の犠牲を出しました。萬里の長城線を第七中隊が第一線、五六中隊が第二線で夜襲をした時はこの山本も死んだと思ひました。七八百の敵兵の陣地の裏山を過ぎて前進中、敵の將校二名を殺し時を移さず突込みました。地雷の爆破輕機

小銃の彈丸の中を突進む時は何が何やら解りません。全く夢中です。この時山本も二名を銃剣でやりました。其氣持よさ、これを手始めに全部で四名、終いには大根をさす様です。銃口までブス／＼とお話になりませぬ。山本も遂に負傷しました。自雷で左手の指を拇指示指、中指の三本をやられました。毎日の治療は痛む爲苦しみますが元氣です。齊地に居る時も戦地に来ても第一番で進みました。唯張家口に入城してから中隊に雉水中隊長殿から「山さん、山さん」の親切な親しみの聲が聴けず行動を同じうすることの出来ないのが實に残念です。これも運命と思ひあきらめて居ります社會に出られた其時は軍隊生活を思ひベストを盡す覺悟です。現在は張家口の第一野戦病院に入院して居りますが次第次第に承德、金州、そして内地に送りかへされることせう。重ねて申上げます。山本負傷致しましたが大變元氣で過して居りますから御安心下さい課長様外皆様には充分の御體に御自愛下さいませ様支那の地に於て祈ります。



後備工兵一等兵

### 森谷榮太郎君

大森八丁目三、八〇七番地

君は出征以來常に前線にあつて歩兵の渡河進撃の爲敵前架橋等に拔群の手柄を立てたが彼大場鎮附近の架橋作業中背部にダム／＼弾の貫通銃創を受け後送され陸軍第二病院に收容加療を受けつゝあり。

(其後同君は患部癒えて本年四月十日召集解除となり歸還し元の通り大森第五小學校に勤務しつゝあり)

左は同君戦傷當時の状況を分隊長保坂伍長より留守宅に通知あり、同君の勤務先の大森第五小學校友澤訓導之を歌に讀み兒童に配布せるもの。

- 一、武動輝く〇部隊 大場鎮も眞近ぞと 敵陣近く攻め寄せば こは何事ぞクリークの

萬が一つにもその爲に

八、勇士を水に沈めなば 我工兵の名折ぞと

鐵より強き責任感 手練の早業腕のさえ

順次に綱を巻き付ける

九、もう良し此で安全と 味方の陣をふりかへる

おゝそのせつな敵弾は にくや背中を貫きて

朱にそまつてばつたりと

一〇、橋の真中に打伏せり 「あつ森谷がやられたぞ」

悲壯な聲は彈丸の中 「おゝ」と飛び出す衛生隊

傷は浅いぞしつかりと

二、勵まされつゝ後方へ 送らるゝ身の無念さに

自分はまだ／＼働ける 南京城を見るまでは

死しても行くぞ皆ととも

三、後送されてたまるかと あばれ廻るを部隊長

君が手柄はあつばれぞ 靜かに傷を癒し來い

目さず敵首都南京で

三、共にバンザイ叫ばんと やさしく慰さめ働れば ぐやし涙にくれつゝも 擔架の人となる

橋は焼かれて影もなし

二、無念切嘴の勇士達 工兵隊は此處にあり

吾等直ちに橋架けて 君等の突撃助けんと

躍り出でたる決死隊

三、「先陣森谷」と呼ばはりてザンプと水に飛び込めば

森谷待て／＼俺もぞと 續きし勇士二人あり

各々繩を首にかけ

四、彈丸雨飛のその中を 見事な抜き手きりながら

向ふ岸へと泳ぎ着く 繩にしばりて材木を

一つ一つとたぐり寄せ

五、直ちに架橋はじむれば 突如火を吐く敵重機

神よ守れと戦友が はるかに祈る涙聲

チャンコロ彈はあたらぬぞ

六、笑顔に向けて敵の陣 従容自若の三裸體

見事に橋を架け終る おゝでかしたと戦友が

思はず叫ぶ萬歳に

七、森谷は一人橋の上 あちらこちとふみ歩く

にはかづくりの假の橋 コロ／＼動く丸太あり

おゝ待望のラツバの音

一四、全員無事に渡りしか 全軍遂ひに突撃か

歡聲揚て攻め入れば 敵は如何でか防ぐ／＼き

算を亂して逃げまどふ

一五、天地もさげよと戦友が 叫ぶかちどき耳にしか

擔架の勇士につこりと 靜に笑ひつ涙ぐむ

終り

### 戦傷者及其父の禮狀

田園調布一ノ一、一三四 森岡正雄君は王家宅附近の戦闘に於て名譽の戦傷を負はれた。此公報に接した岡崎區長は例の通り留守宅を訪問見舞したが、之に對して同氏の父忠尙氏から懇篤な禮狀があり、同文末尾に次の様な同君からの手紙があつた。

一時は生死の境をサマヨツタらしいですがもう大丈夫です。近く東京の病院へ移されることと思ひます何れその時には御通知します。體重は三貫ばかり減り、今日のは出發以來久方振りに入浴します。云々

正雄



輝

武

く

勳



## 陸軍第一病院にて

歩兵一等兵 鈴木友一君

昭和十二年九月七日赤坂歩兵第一聯隊に應召、九月十八日加納部隊に編成の上なつかしい東京を出發した。九月二十日神戸港出航上海に向ふ。船中皆溢るゝばかりの元氣だ、九月二十四日上海着。敵彈の中を上陸、日没を待ち第二線の周家宅に向つて前進、星一つない夜道、敵彈は様々の音をして盛んに飛んで來る中をたゞひた走りの強行軍だ。目的の周家に着いたのが翌二十七日午前〇時、正に夜半だ、休む間もなく二時周家宅を出發、いよゝ敵の大部隊の據れる陽行鎮及び吳淞クリーク攻撃だ、敵は堅固な防禦陣地に待ちかまへての防禦敵の打ち出す彈丸は益々激しい。我勇猛な部隊は友軍數回の連絡を以て漸くにして攻撃隊形を保ちつゝひた押しに進む今次事變稀有の大攻防戦が繰り廣げられたのだ。當時は只無我夢中とも言ふ方が適當かも知れぬ。後送されて幾日か病床に横つて靜に記憶を呼び起してもたゞ夢の様な記憶をたどるに過ぎぬ。

吳淞クリーク正面の敵はなかゝ頑強なので加納部隊の印野隊は大王宅から全家宅に向つて前進十月二日まで留隊し十月三日午前の頃、吳淞クリークの敵に向ひ前進、南王宅に前進、其間敵彈益々激しく戦友の倒るゝもの數知れず。十月四日南王宅から敵前渡河、敵を全滅すべき任務を持った我加納部隊は彈丸雨飛の中を一齊にクリーク前面百五十米に肉薄す、蔽護物一つ無い上に我陣地一帯は泥濘膝を没し前退も思ふにまかせず、加ふるに敵彈益々我隊に集中、此間渡河命令を待つこと數時間渡河中止の命令にて一旦南王宅に退き翌五日は一日彈丸雨の



中に次の命令をまつ、夜に入る、六日午前二時遂に加納部隊は全員決死の覚悟を以て再びクリークの前面攻撃を開始し肉弾を以て之を決行することゝなつた。

忘れもせぬ六日午前四時まだ明けそめぬ闇の中に我印野部隊長の振りかざす軍刀の輝き前進の號令につゞく我々部隊の者、此時とばかり敵は銃火を集中する倒るゝ戦友をいたわる間もあらばこそ、たゞ隊長の後をまつしぐらに進む戦友の倒れる者數知れず。小生幸運にも其中にあつて一弾をも受けず遂にクリークの渡河に成功し敵のトーチカ陣地に突進いよゝ銃は使用せられず弾丸は缺乏し残るは唯肉弾あるのみ、とかうする中我等の部隊長は遂に敵弾の爲に名譽の戦死を遂げられた。

數時間の激戦に連絡も全く不能となる、依つて小生は之が連絡の爲聯隊本部に部隊長の戦死を報告の途中無念にも敵迫撃砲の爲打倒さる。十月七日野戦病院に收容されたことも十一日豫備病院で意識を回復して後漸く命の助かつたことが判つた。十月十七日上海兵站病院に收容全身八ヶ所の傷も軍醫初め皆様の手厚い看護のお蔭で一日快方に向つてゐる。一日も早く退院し再び戦線に立ち働ける日を楽しみに静養を續けて居る。

……四月三日……

(右は町會長鈴木要藏氏に送つた禮状の一部なり)

## 平 林 一 郎 君

大森區大森一ノ四、一八一

東京の新聞にこんな見出しの記事が出た

- 戦 争 の 勇 士……………(昭和一二、一〇、一六東朝)
- 名 譽 の 戦 傷……………(同 日讀賣)
- 敵砲を土産に病院歸りの六勇士……………(一二、一〇、三一讀賣)
- 會 心 の 笑 顔 六 つ……………(昭和一二、一一、九讀賣)
- 歸りがけの駄賃に一稼ぎ……………
- ……武勇傳の主、飯塚部隊勇士……
- ……武 勳 談……………はこうだ

十月二十六日負傷や病氣がなほつて野戦病院から前線の原隊へ歸る途すがら戦友六名で敵の將卒八名を射殺或は捕虜とし迫撃砲其他を分捕つて凱歌をあげた武勳談がそれで其勇士の六名の中に吾平林君が有力な役割を負つてゐる、聞くも痛快な話だ。

六名は皆揃つて一等兵、平林君は顔面に他の二人は頭部に或は尻に残りの二名は病氣でいづれも野戦病院に脾肉の嘆を續けること幾日、二十六日揃つて退院「さあもう一働きだ」とばかり原隊さして急いだ。

ところが丁度其日から戦局は一轉、敵軍は總退却我軍は進撃また追撃で原隊は友軍と共に移動してどこへ行つたか判らず迷つた揚句、出た所が大場嶺を距る二キロの周澤附近だ、丁度敵の敗殘兵が竹箴にかくれて盛に追撃



砲を打つてゐる。『よき手土産』とばかり指揮して居つた將校に組付いて之を組伏せ残る二名を射殺し將校を案内させて五十米突ばかり離れたトーチカに行つて見ると殘敵五名がウロ／＼して居るのを發見、たちまち、銃眼より突き殺し逃げようとした其將校をも射殺、迫撃砲、重機關銃一基を鹵獲し勇んで原隊に歸つて來た………

聴くも痛快な話だ

平林一郎君の留守宅

母 トヨ、妻 よし(二七)

弟 正次(二三)さんの同家ではお母さんが語る

「一郎は子供の頃からきかぬ氣の子でしたよ、これで大手をふつて歸れますわい」と、この子……この母……かくして勇士が生れるのだ………」

### 陸軍歩兵准尉 加藤 東吉君

大森二丁目一八九番地居住

昭和十二年〇月十四日上海戦線〇〇クリク渡河戦に於て僅か〇名の決死隊を率ひ「日本刀の切れ味見よや」とばかり敵の塹壕に躍り込み群がる敵を蹴散らし大刀振りかぶつて阿修羅の如く荒れ廻り見ん事敵の突角陣地を占領し味方の前進を有利に導き天晴れ豪勇の士よと全戦線の將兵を奪ひ立たせた加藤東吉准尉の功名手柄は當時各新聞紙上に寫眞入り大見出しを以て報道されたところである。

君は大森二丁目一八九番地に多年居住し川崎市マツダランブに勤務のかたはら一方選ばれて澤田會役員(理事)

たりしが、今次事變勃發により召しに應じて昭和十二年九月十日勇躍征途に就いたのである。同君其の門出に方り澤田の鎮守淺間神社社頭に於て多數歡送者の歡呼に應へて曰く、「私達軍人の進むべき道は至極平坦簡易です即ち命に従ひ敵に向つて勇敢に戦へばそれでよいのであるから恰も一本道を歩むやうなもので少しもむづかしくはない。之に反して後に残る皆様には銃後の護り職業、生活其の外いろ／＼と仕事が多いので丁度行く手に數條の迷路があるやうなものであつて進んで行くのに仲々骨が折れます戦争に出て行く私達を皆様は大變だと言つて盛大に送つて下さるが實はほんとに大變なのは送つて下さる皆様の方にあるのです。私達は河でもありません。どうか皆様には大事な銃後の重い任務があるのですからお體を大切になさつて下さい」と、言ふのであつた。あゝ何と言ふ健氣な心意氣であらうこの精神を抱く君にして這個の勳功あり眞に深きうなづきを覺へざるを得ない君町會役員としては溫和誠實マツダランブに於ても精勵眞面目を以て定評ありしと……

### 歩兵上等兵 森井 忠藏君

大森區上池上町四二四

昭和十三年一月二十一日の「東京日日」に「川沙占據の奇功！五人斥候、巧まぬ戰術四百の敵兵を走らす、原田少尉、一行の殊勳」の記事があつたのは凡そ同紙の讀者の知らぬ者はあるまい。其將校斥候五人の中の森井上等兵こそ我等の森井忠藏君だ。森井君の加つたこの斥候の一隊がよく奇功を奏したのも選抜されるに至つた平素の君の働きがこゝに現はれたもの。

君は八人兄弟の四男、昭和五年十一月滿洲駐屯軍に入營在營中彼の滿洲事變に参加し勳八等を授與せられ除隊今次の事變に應召昭和十二年九月七日出征されたものである。



歩兵上等兵 内 田 昇 君

上海派遣軍、荻本部隊、田代部隊  
(大森署)

同君は目下戦傷の身を野戦病院に療養中なるも上海上陸以來各地に轉戦し輝かしい戦功を建てられ殊に十一月一日の馬家宅附近の敵陣地攻略戦は實に悪戦苦闘そのものといふべく眞に鬼神を泣かしむるものがある。左に掲ぐるは同君が病院より勤務中なりし大森署長に宛てた書状の一節で其奮戦ぶりを眼前に再現せしむるものがある……前略……過日我々第百四聯隊(田代部隊)は三家村附近の戦鬪に活躍中偶然にも同派出所に勤務せる戸井田馨君の土にまみれ血に染まつた姿と再會お互に元氣な姿を見て手を握り會ひ嬉し涙にくれました。然し戦線の事とて互に使命を持つ身、懐かしい大森の話も出來ず別れました。……吉原君(大森署勤務)戦死の報も塹壕の中に土にまみれて捨て、あつた朝日新聞で偶然に知つた。

上海戦線は實に想像以上の苦戦を續けて居り私達の前面の敵は學生軍並に軍官學校の生徒隊で却々頑強なのに驚いた位です

現在我中隊は三十七名ですが嘗ては百九十八名の全員でした

署長殿 私は十一月一日馬家宅附近の敵陣攻撃に際し決死隊に加はることを得ました決死隊は十七名、午前三時勇躍出發鐵條網の破壊、掩蓋塹壕の中に突入し敵陣突角の占領の命令を受けたのです私は生涯に此時程強い意い決心に打たれた事はありませんでした、

僅々百米の近距離を機銃小銃の猛射を浴びて棉畑の中を匍ひながら進むのです。約一時間で見事鐵條網は破壊

手榴彈の投合ひの後目前に火を吐く敵機銃に唯夢中に突撃しました。隣の戦友は悲痛な叫をあげつゝ斃れる、私は唯夢中……總てを忘れて……全く「夢中」の二字に突き入りました。服は破れ手は傷つき全く夢我夢中で遂に敵の塹壕内に飛び込み見事占領するを得ました。午前四時を過ぎた頃ですがあたりは眞の間「伊達」「政宗」の合言葉と左腕の白腕章で辛じて味方討ちをまぬかれる有様、敵も圖々しく壕内に我友軍と交り暗を利用して退却せぬ者もあつた。何人位突殺したか今ではさつぱり判りませぬ。占領の嬉しさに味方同志相擁して喜び合つたのも東の來敵は間もなく大部隊を以て逆襲して來たのです。

敵との距離は僅にクリーク……約十米彼我の手榴彈は空中に炸裂し再び大激戦となりました。我に援軍到着するも敵は一層其數を増加するのみ、遂には中隊も決死隊は勿論彈は盡き機銃は壊れ、小銃は悪戦苦闘に銃口といはず遊底といはず泥土にまぶれて動かぬ死傷者は續出、敵は益々援軍を増す、そこで友軍は止むなく戦友の屍を背負ふて涙を呑んで一時後退するの止むなきに至りました。實に残念無念でした……

今私は野戦病院に收容せられて居りますが再び第一戦に出て奮闘する日を樂しみ一生懸命治療をつとけて居ります……(後略) 野戦病院にて 内 田 昇

吳淞クリーク強行渡河前夜、壕の中で遙かなる故郷に向つて、  
合掌してゐた輕機の名射手服部上等兵の偲……

歩兵上等兵 服 部 兼 光 君

大森區馬込町四ノ四三〇八



元氣明朗な服部君は常に「大陸に一花咲かせにやならぬ、俺の體は君國の爲に働く機械なのだ」と何度も云ふてゐた、吳淞クリーク強行渡河の前夜、濠の中から故郷に向つて合掌してゐた。其の眼には涙が光つてゐた、この涙は悲しみの涙ではない、今、前進命令を前にしての喜びに満ちて溢れ出る涙であつた。

愈その十月七日未明輕機銃の各射手として敵陣地奪取、逆襲して来る敵に連續に次ぐ連續の猛射撃！さしもの敵も、しばし茫然として銃眼から例のチェッコ製の重機を引き込めてしまふのであつた、雲低くたれこめた吳淞鎮の野に風は速力を加へ雨はひとときは激しい折も折、アツ！我が服部君は遂に大陸に實を結ぶ君となつたのである。

(筆者宮崎元伍長)……昭和一三、三、一五 東朝所 載……

### 彈藥を背にして

#### 悲壯萬歳の聲！船中つひに起たず (東京朝日新聞所載)

歩兵伍長 片山周藏君

大森區雪ヶ谷二五九

時は昭和十二年十月五日場所は蔡家宅の天幕陣地だ彈藥補充の命令を受けたのが午後の五時、今迄配給品の分配で一時賑かだつた陣地の一日は忽ち緊張した、「ヨソツ今日は俺が行かう」と立上つたのは片山上等兵である片山の風邪氣味を知つてゐる他の戦友の止める聲を後にして傍の彈藥箱を背負ひ他の戦友と出發した。敵陣を避

けながら第一線の金家宅に到着したのは夜の八時過ぎだつた、明朝三時を期しての渡河命令は發せられた、少しまどろんだと思ふ間もなく起き出した一同は闇を幸ひ渡河を決定、夜通し打ち續けた敵の彈丸はいよ／＼烈しい寺田大尉を先頭に渡河完了と聞くと彈藥手一同はソレツ後れるな、とばかり塹壕傳ひに渡河線まで進んだ。夜は明け離れた敵陣地からは我渡河線はまる見えだ。追撃砲、機關銃、自動小銃の一斉射撃だ。その下で素裸で禪一つの勇敢な工兵の操る鐵舟……これが彈藥補充の唯一つの渡舟だ。塹壕を飛び上つた彈藥補充隊が鐵舟に乗移つたと見るや敵陣はその舟へ一斉射撃の雨だ。船がクリークの中程に來た頃である、さしも勇敢な片山上等兵も「萬歳」の聲を残して遂に再び起たなかつた。片山君の背負つた彈藥は他の戦友によつて第一線に運ばれ片山君の仇をかへし、敵陣地は立派に我手に歸した。彈藥手の任や重し、片山君は間もなく伍長に昇進した。

### 彰徳城一番乗り

#### 殊勳の三勇士……何れも警視廳巡查 (昭和一二、一一、一四、東朝紙)

歩兵軍曹 高野邊十郎君

東調布警察署勤務

高野邊君は後備歩兵軍曹で昭和十二年八月二十一日應召北支派遣軍土肥原本部隊、森田隊に加はり北支戦線に活躍、十一月四日彰徳攻撃戦に期せずして警視廳巡查二名の勇士と共に決死突撃隊に加はり勇敢な敵前作業



で突撃路を切り開き高野邊軍曹は長谷川准尉指揮一隊と共に敢然、城門を突破し敵彈雨と降る中に躍り込み城壁高く日章旗を掲げ彰徳城一番乗りの殊勳を樹てた此日章旗は同君が出征の折警視廳防疫課員が「武運長久」「一死報國」と書いて出征祝ひに贈つたもので「この友情の贈り物は必ず何時かは自分が殊勳を樹てる事が出来た時に掲揚して廳員の面目を發揮したい」と日頃同君が心ひそかに抱いてゐた其願が今こそ實現した譯である。

### 川沙占據の奇功！

五人斥候、巧まぬ戰術（東京日々新聞所載）

歩兵少尉原 田 福 一 君

大森區調布鶴木町一一一

君は昭和十二年十月六日臨時召集令を受け上海派遣伊東部隊、飯塚部隊、高見部隊副官として活躍中、本年一月十六日將校斥候となり奇功よく四百の敵を走らした武勳談。

杭州を發し一萬五千の殘敵を討伐しつゝ北上中の福井、津田、谷川の各先遣部隊は十月十三日敵の本據香伯全軍司令部を占據後川沙と塘口鎮を結ぶ線に據る敵を殲滅すべく十六日配備に付いた。原田少尉は選ばれて將校斥候となり、森井忠藏（本區池上町出身）外三名の上等兵を伴ひ川沙に向つた、川沙には前日まで敵兵四百が據つてゐた十五日午後二時川沙の二百米手前に至るや城内の住民達は其姿を見てさわめき避難を開始した。これを見

た四百の敵兵が「すは！日本軍來襲」とばかり總崩れに逃げ出し續いて山本順正大尉の一隊が乗り込んで夕刻には市内各戸に日章旗が翻つた。僅五名の將校斥候で四百の敵兵を最かし川沙占據を容易ならしめた。これも平素から臨機應變、奇智に富む原田少尉を知る人の肯く所である。

### 鮮血に染む砲射鏡

鈴木一等兵の彈着觀測

大森區北千束町三九五番地

十一月十三日朝まだき突如として揚子江南岸白茆口附近に上陸した永津佐藤高橋等の各部隊は忽ち疾風迅雷滄浦鎮の敵軍をたゞ一息に蹂躪し餘勢を驅つて豪雨の中を徹夜の強行軍十九日朝には早くも敵の牙城常熟の西方處山を占據して常熟の死命を完全に制した。一方崑山方面から急進撃をつゞけて來た新銳花谷部隊は暗に乗じて崑城湖を押渡り同じく十九日拂曉不意に常熟の南郊に現れて蘇州と常熟をつなぐ街道を遮斷し勢するどく攻めかゝつた。常熟は揚子江南岸福山から起つて蘇州に至り、太湖東岸の吳江に結ぶ所謂吳福陣地の一要害で北から南へ蜿々百キロにあまるこの大バリエード線によつて敵は我が破竹の進撃を喰ひ止めようと必死の防禦陣を張つてゐたのだ。

常熟が陥落したのは十一月十九日その二日前の十七日拂曉常熟縣城を前方〇〇メートルに望む湯庄部落に設けられた我が觀測陣地である「命中だうまくあたつた、もう五六發」民家の屋根から上半身を敵前に曝しながら落着き拂つて友軍の彈着距離を測則してゐるのは街道部隊の名觀測手鈴木弘一等兵、一本の電話線を通じて我が砲兵



陣地に送られるその名観測は一發一發が適確な命中弾とあつて敵の堅壘は片つ端から崩れて行くのだ敵は後方の第二陣へ後退暫壕内に多数の迫撃砲座と機銃座が見える、後退した敵陣への第一發は敵兵の頭上を越して其の後方へ凄まじい土煙を捲き上げた「高過ぎた」「砲身を下げろ」そこで一發あつ命中、立派な命中だ「送話機へ吐く息は眞白だ。明け放れて間も無い寒氣が身を切るやうに冷たい。砲射鏡を覗きながら次の観測を送らうとした利那だつた「あッ？」鈴木一等兵は、突然屋根の上に突伏した。「どうしたッ鈴木ッ？」観測隊長の皮田三男少尉が急いで梯子を駆け上つて行くと、鈴木一等兵は右肩部を敵弾に射抜かれて肩から眞紅になつてゐるのだ。「鈴木俺が代るぞ！お前は後退して手當を受けろ」「いや、大丈夫であります。交替の時間まで頑張ります。」「いかん！そんな傷で正確な観測が出来るか。いいから下へ降りろ」「大丈夫であります。これしきの負傷で観測を狂はす様な鈴木ではありません」。怒つても叱つても退かない。流れる血潮に顔色も變へず砲射鏡にしがみついて離れないのだ「左方三百メートルに敵の新手部隊が現れた巾二百メートル三門の野砲を引張つて居る」どかーんと一發、見ん事故部隊の眞ん中へ落下して土煙と一緒に敵兵が空中へ吹き飛ばされた、「そこだ、續けて二三發大急ぎだぞ」どかーん。どかーん。矢繼早に打ちちはなつ。痛みにも屈せず後方に送る鈴木一等兵の観測の正確さは平常と少しも變らないといふ沈着振りだ「おどろいた男だなアお前は」と疋田観測隊長は呆れてしまつた。交替の時間が来て始めて彼は砲射鏡を次の観測手に譲つた部隊長の命令で濫々野戦病院に入院したが「こんな輕傷で前線を退くなんて軍人の恥辱だ負傷したことは家へ知らせてくれるな」とあくまで頑張り通した。

以上は昭和十三年三月一日發行キング三月號附録支那事變忠勇談感激談の一節であるが鈴木一等兵は大森區北千束町三九五番地に妻鈴木榮。一人を残して居り名譽の戦傷も留守宅には何等知らせもせず病院で治療の後再び第一線に立つた、そして今も亦上海で活躍中とのこと、部隊長から留守宅に通知あつたのみ、妻の榮も亦「折角

名譽ある出征をしたのだから充分働いて貰ひ度いと毎日祈つて居ります現地からは負傷した事も知らして寄越しませんが部隊長殿から御丁寧な御手紙をいただきましたきましてほんとうに有難く思つて居ります、少しばかりの傷で歸される様では残念と思つて居りましたが幸ひ再び第一線に立つて御國の爲に御役に立つ事の出来ますことを喜んで居ります。お國の爲に捧げた身體ですから何時どんな事があつても私は覺悟をして居ります」と、當署係員にけなげな言葉を述べた。

以上

### 兄の遺骨袋を抱き

#### 死の誓ひ果す勇士

津浦線北上進撃の華（昭和十三年二月十二日〇紙所載）

星野登君

大森區調布鶴木町七一

我添田部隊の北上進撃戦中「五里亭の激戦」として津浦線戦の華と謳はれてるが、ゆくりなくもこの激戦のさ中に「祖國愛」と「肉身愛」の二重奏を「死の調べ」をもつて高らかにかなでた一等兵の戦場美談が折からの白雪を紅の血に染めつゝ死んでいつた彼の最後の如く一ときは鮮かに戦友達の思ひ出話の中に咲き出で、將士の胸を感激の嗚咽で塞いでゐる。



星野君は上海戦線以来の勇士で嘗て廣福の南方載家宅の戦闘では鐵條網破壊の決死隊に加はり敵弾で耳朶を打ち抜かれながらも後退せず血連磨になつて任務を果し、しかも一日の休養もなくその後の追撃戦には遙かに長江を越えて幾百里、各地に轉戦した猛者なので、この日一月二十八日五里亭の激戦でも彼の奮戦振りには目覺しかつた、堅固な塹壕を恃みに重機輕機を滅茶うちして我が軍を近づけまいとする敵陣目がけて突撃また突撃、眞先かけて突き進んで行く星野一等兵の姿は折から空も地もたゞ灰色に捲き込まうと荒れ狂ふ吹雪の中にも、さながら阿修羅の再現の如くあり／＼と目に見えて彼の後に續いて突つ走る友軍戰士の士氣をいやが上にも敵陣粉碎へと驅り立てたのであつた、しかし時には武運の神も勇者の行く手を見落す事があつた。不幸にも飛び來つた一弾はこの勇敢な星野一等兵の胸板を射抜いてしまつた、彼は迸る鮮血に鷲毛の吹雪を眞つ赤に染めて「天皇陛下萬歲」の叫びを最後にバツタリ斃れた。

戦友が駈け寄つて彼を抱き起す頃には、敵は陣地を棄て、敗走し、さしもの激戦も我が部隊の勇士らが五里亭高地に轟かす勝鬨の中に終幕を告げてゐたが、星野一等兵卅五年の生涯もこの降り積もる戦場の雪の下で終つてゐた、やがて彼の遺骸を收容した戦友達が其背囊の中から小さな白布の骨袋を發見した時には、それまで彼の勇猛振りを讃へ合つてゐた口を思はずぐんで暫くは凝然と言葉が無かつた、何故なら。その骨袋には筆の跡も丁寧な「星野彌吉郎之靈」と書いてあるではないか、この骨袋の主こそ眞に星野君一等兵のたつた一人の肉親の兄弟だつたのである。

兄弟揃つて應召し所屬も同じ佐伯部隊ではあつたが兄は機關銃隊であつた爲出征以來兄弟が顔を合せたのは去年の十月二十八日頃上海戦線の塹壕中であつた。その時二人は「御國の爲だ、うんと働かう、そして死ぬ時は一緒だぞ」と誓ひ合つたのだ。その誓も空しく兄の彌吉郎上等兵は十二月二日江陰要塞の攻撃で弟に先立つて戦死

してしまつたのである——この兄弟哀話を戦友達は知つてゐた、何で言葉があらう！二人三人とそこへ寄り集つたまゝ弟登一等兵の遺骸と兄彌吉郎一等兵の遺骨袋を中に圍んで思はず手を取り合ひながら、聲をあげて男泣きに泣き崩れたのであつた——兄弟の誓ひを守り、兄の遺骨を背負つて突撃に突撃——常に先頭に立つて遂に死んでいつた勇士の話はかうして戦友等の嗚咽の中から語られたのである。



陣中逸話



「伏せ」は「迂り込み」

“兜切り少尉”殿

原 田 少 尉

「“伏せ”は迂り込みより速い」の由来は――

高見部隊長の言をそのまゝ

「原田少尉の「伏せは野球選手の“迂り込み”より早  
しよ」

全身之れ「バネ」の如き君の張切り方が眼前に彷彿た  
るを覚える。

尙原田少尉は今高見隊の副官をしてゐる。

“兜斬り”のいはれ……。

「……余り張り切り過ぎて前線に出過ぎちやつてね、  
暗夜に稻田圃の中（沈宅附近）を前進してゆくと先頭  
の僕が飛び越えた敵の塹壕から突如！支那兵が一人飛  
出した、いやびつくりしたね、夢中で肩に一太刀浴せ  
た積りだつたが小手先が狂つて鐵兜の真中に斬りつけ  
ちやつたのだよ、翌朝兵が見たらその支那兵、兜ごと  
頭蓋骨が眞二つになつてゐたのださうだ、アツハ、  
」



## 江南の譽れ

### 加納部隊長の靈に捧ぐ

作者 少尉 原田 福二君  
上等兵 鶴澤 慎太郎君  
上等兵 龜山 茂雄君

#### 江南の譽

- 一、戰雲渦く江南に  
聖旨かしくむ將兵は  
壯烈無比鬼神哭く  
あゝ勇壯の高見隊
- 二、戰友と誓ひし言の葉に  
必ず撃ちて進まん  
東拜みし此の朝  
心は一つ決死隊

三、渡るに難きクリークに

たむけの花は頼むぞと

頬にあふるゝ武士の

香も高き大和花

四、不運の豪雨襲ひ來て

濁流我を呑まんとす

シヤベル持つ手も泥濘に

意氣以て尙も進撃す

五、あゝ勇ましき我戰友よ

君が勳功の数々は

我等武人の鑑にて

永久に輝き照すらん

六、江南の空晴れ渡り

朝日に輝く日章旗

東洋平和の基礎成りて

譽れは高し高見隊

(東京日日新聞所載)

## 御國の爲—此一念

松本 直 高君

田園調布二ノ九六四

松本君は當地内田米居に雇はれてゐた頃から誠に精勵で主人の信頼を受け多くの店員の模範とされた程、忠實な人であつた。妻女とり君は蒲柳の質で君との間に義一(六歳)政男(二歳)の二男があるが共に襁褓にして人の手を待つといふ兎角病氣勝ちであつた。生花の店を営み兩人協力致々として其業を勵み漸く發展の途上にある、偶々八月二十一日妻女病を得て急逝し松本君の悲歎やる方なし葬送を済まして二旬ならず、九月七日召集令は君の家に配られた。生母は病病を得て藥餌に親しみ慈母を失つた二兒はさみしさに泣く。松本君は一時は途方に暮れたが斯くてあるべきにあらず後事を近隣親戚に萬事を托し勇躍征途についた。語るもの聴く者其壯烈に泣かざるものなし。君出征後は○の地に在り、至忠至誠躍如として強敵を破り一死生

還を期せず。幸ひにも幾多危地を脱して今健在である  
と、我等は之を涙なくして語ることを得ざると共に之  
を銃後に記し以て君國精忠の士の奮起を冀ふ次第であ  
る。

—小林金次氏寄—

上海派遣軍 松井部隊

青柳部隊 小沼隊

中 川 光 雄 君

大森區新井宿六丁目四三六

昭和十二年九月二十日○港を汽船で出帆し上海に  
敵前上陸し、第一線の戦闘に参加しました、上陸以來  
毎日毎日雨ばかりで、泥濘は腰をも没し、人も砲車も  
馬もまるで土人形の様です、見渡す限り一面の沼で道  
路を見分けるのが一苦勞です。ウツカリするとクリー  
クに落ち込むので前進に非常に苦勞します、シャツから  
白い腹巻き迄ビショ濡れにて赤土色に染つてしまひま  
した、一同元氣は益々盛んにして毎日二十里二十五里



と前進して行く行く前面の敵を殲滅しつゝ十月中旬には、大場鎮の東方に進みました、愈々大場鎮總攻撃の命下り我隊も一聲に砲火の火蓋を切つて猛烈な砲撃を開始致しました、其の銃砲聲は眞に天地も裂けるかと思ふばかりにて筆紙に表す言葉がありません、夜に入れば尙一層壯烈にて砲火の炸烈、照明彈の火蓋の美しさ人力で表現し得る最大の場面だと思ひました、敵乍らも天晴の抵抗ぶりにて大激戦を連続しましたが遂に十月二十九日さしもの堅壘大場鎮も陥落しまして勇躍入城しました、街は見渡す限り焼野原と化し、きだ焼落ちない柱などが處々に残つてゐるのも新戦場の趾がしのべれます。

そのまゝ休む間もなく追撃戦にうつり、クリークや沼の連続なる江南を前進又前進、太湖の西側を通過して一路敵首都南京を目差して進撃しました、太湖の北側を通過して朝に一城夕に一壘を陥しつゝ快速で進みました。その間自分は敵首級八個を得ました。

三月上旬南京郊外に達しまして一齊總攻撃が開始さ

れました、空陸海の全力を集めての猛攻撃にさすがの敵首都もさゝへ切れず撃滅し盡しまして三月十三日未明陥落致しました、我部隊は南京郊外四キロの〇〇鎮に本據を置き次の作戦準備につきました。

三月十七日は記念すべき南京入城式でした、詳細はラヂオや新聞、ニュース映畫で知られてゐる通であります、自分も皇軍の一員として此の歴史的盛儀に参加し得た事は生涯の名譽であります。只に涙が流れてしよがありませんでした、これこそ眞に東洋平和と皇國興隆のプロローグと思ひました、そして皇國百年の計の爲一死報國の念に燃えました。

その後自分は南京に駐在しまして、南京市内の復興に働いて居ります、暗黒の都と化してゐる南京市内に電灯點火の命を受け早速市内をオートバイで馳け巡つて材料を蒐集し、電気工事の出来る支那人を集めまして工事に着手しまして工事に着手しました、必要な支那語も自然習得しまして、無事使命を果たしました、工事に使用した支那人實によく働き心から協力してゐる

のが判ります、斯くて自分の特技を發揮して、南京市内の光を復興し得た事は嬉しい思ひ出であります。

そして只今は又他の特別任務に就いてゐます、斯くて我々が着々任務を遂行しつゝあるのも畏れ多くも上御稜威の然らしむる處なるは申す迄もなく、銃後の皆様様の厚い御後援の賜と日夜感謝して居ります、尙一層奮闘努力東洋平和達成の日迄命の有る限り盡忠報國の覺悟で居ります。

出征以來の経過の概要を述べて銃後の御後援に厚く御禮申上げます。

(終)

冬が偲べれます、銃後の皆様、自愛せられよ。

飯塚部隊 高橋久四郎 君

池上徳持町九三六

東洋平和の基礎なりて上海の空日清く澄み渡りたる寒空に雁の一群はいづこともなく飛び去つて行きました、元氣旺盛にて上海警備に當つて居ります。

村瀬部隊 田中久四郎 君

大森七丁目一四六

最前に飛躍出来ないのを残念に思ひます、しかし任務に一意専心皇國の爲に奮闘を誓ひます、輸送船を友として我々特務兵、長期抗戰恐れずの意氣です。

## 一筆啓上

(東日所載)

飯塚部隊

印波 秋市 君

雪ヶ谷町六〇六

今日計らずも日日新聞の記者殿が来られ御厚意によつて皆様へお便りする機會を得ました。戦地にも冬が來ました、凍つた舗道に落葉のカサコソとなる内地の



戦線より銃後へ



陸軍輜重兵特務兵

### 金子 和枝君

君は昭和九年推されて帝國在郷軍人會大森分會評議員となつてから分會の爲に盡瘁した功績誠に尠くなかつた。今事變勃發するや業務多忙の寸暇をさいては出征兵の見送り召集令狀の傳達等に奔命中突如として君自身にもまた名譽ある召集令狀が送達され幾多の同僚の歡呼を浴びて元氣一杯征途に就いた。偶々友人の便りによつて澤田郷軍第九班員一同が國民精神總動員の線に副ふべく國旗掲揚柱を建設し且つ士氣を鼓舞して明日の應召に備ふるため銃劍術の練習をはじめ其防具を購入の由を知るや其資金の一助にとて金拾圓也を第九班宛に更に又澤田會内の戦死者への香奠に加へられたしとて町會長宛に金五圓也を送り届けられた。戦地では自然に人氣は荒んで來るに従つてひまある場合は小遣もよけいに要る筈であらうと思はれるにあべこべに戦地から銃後への資金や香奠を送つて來るとは自ら

頭の下る話である。言ふは易く行ふは難し。同君の此の精神こそ眞に時と處に係らざる「盡忠報國の眞心」と稱すべく以て範とするに足るものと信ずる(澤田會)

### 砲兵曹長 鈴木 利文君

大森區調布嶺町一ノ三六八

同君は昨年十月八日動員令に接して勇躍征途に上られた。上海上陸後間もなく同方面の戦闘に右肩貫通銃創を受け野戦病院に收容せられたと聞いたが其後傷も癒えて再び第一線に活動中とは先づ喜ばしいことだ。ところが此程久方ぶりに東調布第一小學校長倉橋氏に手紙と共に金拾圓也を送り届け、「學用品の十分でない兒童に……」とのやさしい便り、そこで學校長は各學級の中から一名づゝの兒童に筆入一個づゝを贈り同君の志を傳へた。之を受けた兒童父兄共に感謝し何れも禮狀を彼の地の同君に送つた。

戦線と銃後を結ぶ麗はしい話の一つ。



(東調布第一小學校長倉橋鹿市氏寄)  
因に同氏は今砲兵曹長に進級されたが同地の青年學校の指導員として熱心な青年教育者である。

### 鵜澤 信雄君

(所屬隊) 上海派遣森永部隊八下田隊  
(留守宅) 大森區入新井四ノ九松竹莊アパート

同君は目下上海方面にあつて活躍中、此程出征家族、貧困者の生活費の一部にもと僅かな給料の中から金五圓也を大森區兵事義會長宛送金し來られた。

### 歩兵伍長 小池 永助君

(留守宅) 新井宿六丁目六七一

同君は上海方面に派遣せられ活躍中今年一月十七日給料の一部をさいて金拾五圓也を出征軍人家族慰問費へと送金して來られた。

### 一兵士より (其二)

本區から出征目下上海戦線に活動されつゝある一兵士から

「本月分の俸給——として金拾圓貳拾四錢也を受取候……とて金額其まゝ出征軍人の小供に——」との文意の手紙を添へて本區長宛送つて來られた。

### 一兵士より (其二)

右同様の意味で金拾圓、別に送金があつた。

前略今回第一線にて名譽なる戦死者の靈及び遺族の方に衷心より弔意を表します、一兵士ですが俸給の一部ですが線香でも買つて靈前に備へて下さい。御厄介ながら御願ひいたします。

亂筆にて失禮致します。

一兵士より

### 藤井 義敏君

(所屬) 上海派遣軍飯塚部隊 高見部隊 上野隊

同君より俸給の一部を割いて出征族慰問の一部にとて金五圓也を本區々長宛送金された。

### 高橋 タネ子

東洋の今様ナイチンゲール

世に秘められた天使の聖女、今様東洋ナイチンゲール。猛將兵も只々涙あるのみ。

日支事變勃發するや愛國の燃ゆる心やるせなく、夫有り子有る身でありながら斷ち切り難き肉身の氣綱を心の中に思ひ切つて單身渡支、北支戦線の各地に傷病兵の看護は勿論、第一線の將兵に迄其の愛情の泉を傾け心なき人までも自づと其の森嚴に打ちたしめ、輝しき博愛の心によつて幾多の激戦に傷き打ち疲れた心を慰めて北支に點在せる皇軍より無限の感動を受けられてゐる今様東洋ナイチンゲールが此度吾等の野戦豫備病院を來訪され親しく患者の看護に没頭されつゝある。其高橋タネ子様の御精神を内地にある兒童達の爲、延いては各種婦人團體の爲めに書き綴らせていたゞき

度ふ御座います。高橋タネ子様の御両親は弘前の藩士で、明治廿五年北海道石狩國東旭川村に渡道して開拓事業に没頭されました。ところが開拓事業の爲めに家は傾き、其の逆境の中にタネ子様は生れられました。父は藤田貞元といつて由緒ある士族、母きえ子様はタネ子様の教育を嚴格にされて常に人は逆境に抗して強く戦ふ、そこに堅忍不拔の精神が築かれるのだと教育された。實に母堂こそ現在のタネ子様を作つた情熱的愛國の母であつたさうです。小學校より女學校を了へて現在の良人高橋泰醫師に嫁でからは良妻賢母振りを發揮し公にしては公益事業や各種團體の先驅者として村の爲めに盡し、内に在りては良人のよき内助者となり婦人の好模範を示されてゐたのださうです。

昭和十一年北海道特別大演習の際畏れ多くも秩父宮殿下の宴會席上に選ばれ御杓に出で、光榮に浴した程で一部の人からは嫉みの蔭口を聞いた程であつたが、度量の廣いタネ子様は將來私の事が皆様に判つて載ける時機が來るでせうからと、隠忍自重されて居られた



さうです。それなればこそ村の爲めには幾多の功績を納められ、其の例枚舉に追ない程で内地に在つて皇軍將兵の慰問に乗り出し陸軍省に慰問袋を差し出し自らは卒先して女性の命と頼む結婚指輪を献納して、陸軍省より感謝状を載いた程の人でした。かくする中事變が愈々本格的となるや四十歳を過ぐる今日奮然として起ち戦死傷兵の幻に吸引され日頃の念願を實踐躬行するは此時と良人の許を得て母國を離れ玄海灘を渡つた男優りの女史が天津兵站病院を初めに北平、濠州、保定さては張家口大同へと各地の野戦病院を訪れて心からなる戦傷兵の看護に力の續く限り渾心の努力を拂はれつゝ有ります。我が病院へ來られて早くも三週間、少しの疲れも見せず慈愛の籠れる看護に没頭されて居ります。其間の困難辛苦は皆様の御想像に御委せ致します。病室に在つて至れり盡せりの看護の間に常に患者に云はれる御言葉は「御國の爲に戦つて不具になられた立派な皆様の爲にどうかして御嫁さんを御世話してやりたい、兎角日本の風習は彼の人は不具だからと云

となりて下さいますやう（後略）

於大同 關口 字 作

編者曰、本文署名關口氏は〇〇方面の部隊長として戦線に活躍されてゐる方ですが戦線に於ける生々しい體驗は銃後國民教育の資料としてこの事實を記して区内池雪小學校長外職員兒童一同、愛國、國防婦人會に送られたもの——而して坂口校長は美談集編輯の趣旨に對しわざわざ提供されたもの、讀者之を諒せよ。

## 江南戦線から隣人愛

### 歳末同情金………

#### 『兜斬り少尉から此同情金』

—（東京日々新聞社所載）—

昭和十二年十一月二十日東調布警察署長と東調布方面委員長田丸徳成氏と宛て十圓づゝの歳末同情金を送つて來た。

野崎署長宛の手紙には

「今日まで別状なく過すことの出來ましたのも銃後の

ふ觀念で己が愛娘を嫁せるのを嫌ふ習慣に流れてゐますが、此の際皇國の爲身を犠牲にされて戦はれた尊き戦傷者の爲には是非共奮來の陋習を破る様内地の女性に呼び掛け現日本を認識して目醒めて貰ひたい」と切に心の奥に秘められた念願を語られてゐました。タネ子様は元氣潑刺とした心の持ち主です。護られる患者の全てが感涙に咽んで、治つたら再び前線にたつて御國の爲に働き御恩に報ひますと誓はれます。タネ子様も其の言葉を聞いて熱涙の逆るのを止める事が出來ず共に共に只涙在るのみでした。

噫！ 尊き慰問使。大和撫子よ。東洋のナイチンゲールをして、神よ行く先御無事であらしめよ。タネ子様の此精神こそ國家非常時の今日、國民として共に學び共に尊敬すべきことだらうと思ひます。

先に御便り差上げ幾多の御返信を受けて感謝致しましたが、再びペンを走らせて皆様の耳目を煩はしますが何卒惡しからず。國家を安泰に置き永遠の平和の爲兒童諸君も先生方の御教訓を守り將來國家の中堅人物

熱烈な御後援の賜です、ついでには少額ですがこの金で出征兵家族その他へお正月の餅一つづゝにても御分配願ひ致し度、私達戦線においては金錢は必要ありません、皆様の御後援を思へば涙なくしてはおられませんと」

鐵兜諸共敵兵の頭をたゞき斬つた豪勇原田少尉の此涙ぐましいやさしさに一同感激してゐる。

## 戦線の無名氏より

東調布警察署長宛金拾圓に左記手紙を添へて送り來る。

私は内地の皆様御後援によつて元氣で働いて居る北支の一兵士です、今度の事變によつて父を、兄をそして夫を戦線に送つてゐる御家族が多數ありますが幸ひ私は管内に父も兄も居て別に家の事は心配ありませんが、それに引きかへ前記の方々は新年を迎えて嘸、お困りのことと思ひます。

同封の金は自分の小使錢ですが何卒管内のお困りの



方々に餅でも上げて下さい、お願申します。

山西省の一兵士

東調布警察署長殿

### 長期抗戦々線より啓上

寒氣益加はり元氣愈々旺盛です、朝のうちは零下四五度といふ冷寒も珍らしくありませんが内地特に東京の寒氣凛烈たる酷寒の日に比べては物の數でもありません、否緯度が違ふ丈概して暖かい様にも思はれます、殊に北支出征の戦友を思へば當中支方面は有難涙がこぼれる位暮し易いと思ひます、唯大陸特有の三寒四暑寒暖常ならぬ激變振りには聊不慣れであるといふ弱點も「戦線にある」といふ過剩元氣で優に埋め合せて居ます、全將兵風邪一つ引かず張切つて居ることを以て御想像下さい。

前任地金山に於ける一ヶ月半に亘る任務を了へて我茂木部隊は去一月十日當盛澤鎮に移動して参りました

て飲めばまんさらでもありません。考へて見ると成程支那の茶は香氣が強い、支那料理はシツコイ、油でカモフラージュして食ふ。此水では宇治の茶の風味も臺無しです、日本料理のアツサリした味は出ない、成程なあゝとんだ所で感心……(中略)……

幸ひに後方兵站部の勤務ですから、糧食等も大して不自由を感じず、一週間に一度は桶職の隊員が作つて呉れた風呂桶で野天風呂の痛快味を味はう丈の餘裕を持つて居ますが第一線部隊の固苦缺乏振りを聞くにつけ涙なしでは居られません。日に何十里の行軍を続け疲れ果て、脂と埃とでゴリラの様になつた顔と手足を引きずりながら三々五々歸還して来る歩兵砲兵部隊によく會ひます。追撃に次々に追撃、漸く戦終り飢餓に迫つて辿りついた宿舎に待つて居るのは家探しをして辛うじて得たる南京米と支那酒と名も知らぬ支那煙草と、そして嗚呼、昨日まで元氣に戦つた幾多戦友の遺骨とであつた。とは彼等の語つた實話ですよ。糧食よりも彈藥が貴重な第一線では糧食品の積送が間に合

、金山より更に三十里許り黃浦江を遡流し支流又支流といふ凡てクリークを廻りて黎里鎮、平望を経て當地に到着、此クリークこそ五億の民の水の生命線、交通、運輸、洗滌、飲用、凡ての活動の根源は此クリークの水力に依るので、早い話が道路の完備せぬ田舎道に自動車車輪を泥濘に埋めて「動く自動車」の代りに「押される自動車」の苦汁を嘗めるよりも民家の舂舟を一艘徴發してクリークを縫つて漕いだ方が遙かに手輕で敏捷です、街道は此クリークに沿つて建てられ各家庭の裏口は石段によつて此流れと連絡、勝手口即ちクリークといふ觀があります、市中貫流のクリークの水は流通するものは少なく殆んど皆行止りの溜り水です。天候の加減で時には濁水し時には氾濫し……ひどい奴があつた者で、此クリークで盛に便器を洗つて居るではありませんか、支那人は平氣でやつて居る……窮すれば通ずとか此の人間臭豊かなクリーク水にも此頃は太分慣れて平氣でお茶に濁して飲める様になつたのも戦争の經驗の賜、配給の番茶を黒焦げに煎つ

はない位急激な追撃をしたのですね、夫れに比べて我々の部隊は未だ彈丸の洗禮を受けず、劍戟の閃光に最かさし事もなく、特に之といふ功績も目立つた活動ともなく全く國民の前に如何にして謝してよいか忸怩たるものがあります。之も凡ては公の命する所、軍の要求する所に従ひ焦る心押し鎮め唯々として命令に服して居るだけです。「大根菜つ葉切るのも國の爲……」と親念して欣然として服務、滅私奉公の一念あるのみです。當盛澤鎮も親日派による治安維持會が出来て居る、先日途中で維新會長王興泉氏に遇ひ握手して別れました「日本軍の保護下になればもう大丈夫」といつて居ました、住民の大半は退去しましたがボツボツ歸任して秩序恢復中です、山本部隊長始め軍の高級幹部に於ても努めて良民を保護する様、日支親善の範を垂れる様との下達に従ひ將兵一同絶対に暴行、掠奪をつゝし、喜語交歡の風景を示して居ります。従つて殘留民一同も其居に安んじ日本兵士の歩く所却つてコソ盗や空巢狙ひが其跡を絶ち、日本軍歡迎、天皇



陛下萬歳を謳歌して居る状態です。維持會でも色々便宜を計つて呉れ、當隊へも毎朝支那人が十名許り参り水汲み、掃除、洗濯、運搬其他の雜役に従事して呉れますので大助かりです、……彼等傭員は勿論無給で三度の食事丈與へる、尤も此際失業して飯の喰へないルンペン苦力共、御蔭で三度三度温かい飯が腹一杯食べられて、嫌やでも皇軍萬歳である、食事頃になると残飯貰ひに蟻集する子供等の如何に多いことよ、各地で行き交ふ無邪氣な幼兒等の顔を見る度に、子供等の爲にも「絶対に戦争には勝たざるべからず」との鐵則を沁々體驗しますよ。

各地の友人知己は勿論一面識もない人達から寄せられる慰問、感謝、激勵、情ある御言葉には其都度ホロリとします。動員令状を受けたときは無我夢中で歡送會に臨み、眼に餘る旗の波、人の波の中を泳いで營門に駆けつけた時は人心地もせず、つねられても痛さを感じなかつた我身、歡呼の聲に押し出されて故國を發つてから戦地に上陸する迄は船に酔ひ酒に酔つた心地

して己の爲すべき任務をも認識せず、慚愧に堪へなかつたもので、此地に渡つてきて皆さんから情と涙の溢れる數々の御手紙を頂いて、斯くも思はれ期待され祝福される自分であつたかと始めて我に還つた様に何處から生ずるとも知れぬ熱が、力が、元氣が湧き出て來るのです。

有史以來未曾有の全國民の緊張、團結熱誠、献身的努力を報ぜられる毎にともすれば弛み勝ちな心を引きしめ、振ひ立たせて土を蹴り閻を破て任務に赴くのです。我兵の肉體は單なる機械に過ぎなくて其原動力たるガソリンは凡て銃後から送られる熱情と慰藉とに依つて補給されるのです、國民の魂が私共の肉體に乗り移つて拙なき身體を運轉し活躍させ或時は奇蹟と思はれる事まで現はるものでせう。國民の元氣が私共の足と手とを働かせ歡呼の聲が私共の聲帯に感應して怒號させ獅子吼させて居る氣持です。

戦地で一番困窮の飲料水がなくとも、米がなくとも命がつかず、何とかして生きて行く丈は生きて行

きます。だが此力強い銃後の聲がなかつたら戦は出來ないでせう。少くとも花々しい勝ち戦は難しかつたでせうね、輝かしい戦捷は獨り皇軍の捕獲品ではなくて全國民の貴重なる熱誠の結果です。

おのづから湧き出づる力 このいのち  
捧げんとぞ思ふ 銃後思へば  
之豈一人私のみ氣持ならんや、斯くして全將兵皆意氣に燃え感謝に震へて欣然として勤務にいそしんで居るのです。……(後略)

盛澤鎮宿營に於て

茂木部隊 海老坂與一拜

(大森區 千束町)

町會長 岸本正雄殿

### 藤井義敏君

「區内出征家族慰問金の一部へ」とて金五也圓をわざわざ上海戦線から送金せられた。

### 本社(讀賣)診療所へ前線勇士

が義金"感冒の帝都"を案じて

山腰部隊の上等兵宮本邦治君は本社の小俣上海特派員に託して金五圓を本社診療所へといつて送金して來た。

宮本君は大森區入新井四丁目三四土木請負業宮本國之助さんの長男、中支松江の第一線に活躍してゐるが今年には東京に感冒患者が多いときいて本社診療所に美しい志を寄せたものである (三、五、讀賣)

### 大川内司令官からの禮狀

去る十月二十日の區會に於て寺内、松井最高指揮官並大川内司令官に對し感謝文贈呈の件を可決直に之を現地に發送したが、大川内司令官から左の如き感謝に満ちた禮狀が届いた。

「大川内司令官からの禮狀」



謹啓 御懇篤なる御慰問御激勵を辱ふし感謝の外無  
之厚く御禮申上候

事變發生以來各方面よりの熱烈なる後援を受け戦  
場第一線に在る身に取りては非常に心強きを感じ  
居る處に有之殊に私の地元の方よりは格別の御激  
勵を辱うし居り留守宅等へも何かと御配慮に預り  
居る趣只管感謝し居申候、御蔭を以て當面の敵を  
撃攘し得て、當陸戦隊としては此處に作戦上の一  
段落を告ぐる事と相成候事は 御稜威と部下の奮  
戦による事勿論なるも又各位御後援の御蔭と感激  
致し居申候

陣中忙卒亂筆ながら御禮申述度候 敬具

十月二十九日

大川内 傳七

岡崎榮松殿  
佛木剛策殿

侍史

### 年始狀に添へて

本區内久ヶ原町九二〇番地より北支方面に派遣され  
た工兵大佐藤井鷹雄氏より

- 四百餘州 御稜威輝く初日の出
- 北中支からりと晴れて御代の春
- 初夢や蔣介石を捕虜として

## 銃後を護る



大森二丁目四五番地居住

### 陸軍歩兵伍長 古屋傳君の其家族

君は山梨縣の出身、昭和十二年九月四日召集令狀に接するや軍人らしく深く兩親と妻に別を告げ、勇氣凜然として出發した。九月二十八日南支〇〇〇南方〇〇米〇〇〇附近の戦闘に於て彈丸雨飛の中を率先陣頭に立ちて勇戦奮闘敵に多大の損害を與へたが無敵の一彈を蒙り名譽の戦傷を負ふに至つたが幸にも經過良好再び戦線に立つて活躍中である。

然るに一方一家の柱石を戦場に送り生活上の大黒柱を失ひ今は同君の勤務先だつた松竹映畫會社より給せらるゝ若干の補助金が唯一の収入となつた。で、この『御國の非常時に手を空しくして人様のお世話になる様な事があつては相すまぬ』と父は老の身を傳手を求めて蒲田區内の富士鐵工所に、母は澤田通り柳屋海苔工場に、又妻のよ志は同じく澤田の町會長田中彌次右エ門氏を其自宅に訪ねて其の旨を述べ同氏の經營する

### 應召者家族の 健氣な働き振り

大森區北千束町三九七番地

### 木田はる子

本田はる子は北支派遣軍山岡兵團松井節部隊本部付上等兵本田善雄氏の妻女なるが昨年十月出征以來一子、一男（高輪商業一年生）君と共に三名の少年使用人を督勵して家業たる甘納豆製造業に勵み親戚等の援助を謝絶して朝は五時より夜は十一時十二時に至り徹夜することも少からず心身を削るの思を爲し又戦地の夫を慰むることを忘れず大いに激勵發奮せしめつゝあり家計亦主人在住中より豊裕にし四隣賞讃せざるものなし。

（深澤町會長寄）



海苔罐詰工場に共に工女となり、一家三人力を協せて働きつゝ家庭を護り傳君をして後顧の憂をなからしめてゐる。多數の中にはたま／＼世の同情になれて如何にも不愉快を覺ゆるが如き態度をなす遺家族があるとかいふ今日、此の古谷君の家族の如きは誠に健氣なる人々と言ふ可きである。

(澤田會)

大森區池上徳持町三七三

### 故陸軍歩兵伍長 鈴木松之助君未亡人

鈴木 ヤエ君

(三九歳)

夫松之助氏召集されて後獨力家業たる支那料理業を經營し夫をして後顧の憂なからしめんことを期したり。偶々夫君の武運拙く戦死の報來る。ヤエ女は一時は悲歎に暮れたがかくてあるべきにあらずと心をと直し益々家業に勵み大森區其他の扶助を辭退し而も夫出征前雇入れた支那人を其のまゝ使役し居れり。近隣此健氣なヤエ女の奮闘振には一は感謝し且つは同情し更

に店業一段と繁榮しつゝありと、誠に頼母しき逸話の一なり。

### 歸郷者の美譽

現住所 大森區徳持町三九六  
出身地 奈良縣吉野郡下北山村

後備役工兵上等兵 植村 文雄君

植村君は昭和十二年十月五日召集令狀に接し勇躍東京なる中野電信隊に馳せ參じたが二ヶ月間隊内勤務の後歸休を命ぜられた。同人は遺憾やる方なくせめても出征家族の爲にと金壹百圓也を郷里なる在郷軍人會に寄贈した。左記は郷里下北山村の在郷軍人會顧問中瀬古氏から原隊々長に送つた書狀であるが此の植村君の美譽は同隊長から麻布聯隊區司令部への報告で本會の知るところとなつたもの、

書 狀

謹啓戦勝に輝く新年を御迎へ四海同風實に御目出度

存じ上候

陳者貴隊に應召勤務中の本村出身植村文雄君より本日拙者宛書狀と共に出征軍人家族慰問品にと指定し金壹百圓也の巨額を寄贈致され候。此の書面に依れば去る十月五日大命を拜受勇躍應召せしに今回歸休除隊の内報ありしとて第一線に出動するを心得此の儘家庭に歸るは面目なく第一線軍人に對して申譯なくされば銃後の守りとして郷里の出征兵家族の御慰問の一端に致し度しとあり。現在應召の身にて今後の時局の推移の如何に依り再度出征となるやも知れず然も無資産の一勞働者として此の擧は實に感激の外なく世間軍事美談他に有りと雖も同君の擧は美談中の美として賞讃に價するものと存じ深く感銘仕り候之れ即ち本人の崇高なる誠意の表現なりと申し乍ら御懇篤なる貴官の御教訓に依る結果と存じ茲に謹んで貴官並に植村君へ敬意と感謝の意を表する次第に候

之の清き尊き義品を寄託されし拙者は周到なる注意を拂ひ關係當局と親しく協議を遂げ意義深からしめ御

意に添ふ可く候間御安心相成度候

甚だ失禮乍ら以書中御厚禮申上度如斯御座候

昭和十三年一月十一日

奈良縣吉野郡下北山村

在郷軍人會顧問 中瀬古種一

中野電信隊長殿

池上本町六三番地砲兵少尉金澤禮助君は動員に接し勇躍入隊したが即日歸郷となつたとて大森區銃後連絡委員會に金五圓を寄附した。

此の外大森七丁目七〇番地革島友之助君の貳拾圓を筆頭に右委員會に寄附された歸郷者は左記の通り

入新井三丁目四七番地	山田 市 郎君
新井宿一ノ二三七二 (ヒノデテラ内)	小 池 亘君
山王一丁目二六二九番地	鈴木 一 助君
山王二丁目一九〇〇番地(森方)	久 保 顯 二君
南千束町三一〇	關 茂君
道々橋町二三	三 部 市 太 郎君



## 銃後の護り

### 兄弟三人揃って上海に

馬込町東三丁目 番地須山忠藏方では令弟の金一君、四郎次君、由良君の兄弟三人が揃ひも揃つて出征されて而も同じ上海方面で今盛に活躍中なさうだが長兄の忠藏氏も軍籍にあることゝて今か今かと只管出征の日を待ちわびて居ると——近隣の話そのまゝ——

### 出征兵士其と家族の慰問

馬込町東三丁目五八番地にある横田屋薪炭店では昭和十二年も押迫つた暮の十二月、出征兵士の家庭慰問として木炭九俵を町内の一日會に持参し町内で世帯主の出征された家庭へ夫々寄贈配布方を依頼した。同町會では右九名の出征軍人に對し慰問袋一個づゝを小包郵便を以て夫々送付した。

### 山口源次郎氏

大森區新井宿六丁目六六五番地

同氏は平素町内に於ても模範人物として推賞されてゐる。今次事變に際しては二令息は召集されてすでに戦線にあり、二男晴見氏は久しく病床にあつたが藥石効なく遂に三月二日夕方眠るが如く他界された。同氏はこの悲報を出征中の二令息に知らせ、折角奉公中の者にいささかでず支障あらんかと之を秘し、且つ告別式参列等の偽銃後を守る近隣の人達が各其業を休む等の事があつては相済まぬと遺骸は病院から直接火葬場に移し葬儀もほんの親戚知己の者打寄りいとも質素に営まれた。

加之、其節約された葬送費を陸海軍に獻金し、野戦重砲兵補充員たる令息の遺志を果さんとすの爲に出たのは洵に感すべき行爲で銃後を守る父として一面又陛下の赤子として眞に大森區のほこりとすべし」と——同町内八木澤氏の言をそのまゝ——

困に

### 此子——此父

平野進君

大森區入新井四丁目四七

同君は事變應召まで品川區の日本光學株式會社に勤務して居つた。家には両親の外に兄妹四人ゐる。兄は子供の時にフトしたことが因で今では自分用も足らぬ體、父は以前は鐵商として相當の暮しをしてゐたが經濟界の變動に際し失敗してからは次々に不運が續き遂に事業から手を引いたので今では平野君が前記會社から受ける僅の補助金と白木屋に勤める姉ツギさんの給料が家族六人の生活費であつた。

大森區役所社會課では應召者家族の調査の結果、此平野家も扶助を要するものとして其手續を採ることゝした。偶々出征後しばらく音信の絶えてゐた進君から若干の金が父善次郎さんの手許に送られ、つゞいて本人からの手紙が配達された。其文面に「此金は自分が好きな煙草もやめて儉約して貯めた給料であるが家の

前記晴見氏葬儀についてその山口氏の知人に送れる挨拶状を左に

謹啓 時下漸く春暖之候愈々御清適之段大慶に奉存候

陳者次男野戰重砲兵補充員晴見儀永々入院加療中に有之候處療養相不叶三月二日午後六時石神井慈雲堂病院に於て死去致候從て目下の國難に御奉公も出來ず誠に遺憾に御座候

生前一方ならず御眷顧を蒙り居候まゝにて當人も只管御禮申述居候 就ては刻下非常時局の折柄出征中の兄弟兩人には之を秘し直接病院より形許りの葬送相濟し葬費の一部は陸海國防費へ寄附し幾分にて當人の靈擔を軽く致度念じ居り候 尙甚だ勝手乍ら御供物等は一切固辭仕候右取不敢御報知迄 勿々頓首

昭和十三年三月 日

山口源次郎

殿



者が他人の世話にならず、どうやら暮して居るならば国防献金に……」との心を込めた一節、これを読んで父善次さんは萬感交々胸に迫り暗涙にむせんだ……其翌朝善次郎さんは早速區の社會課に出頭し、扶助を辭退した。善次郎さんの話の筋はかうだ。「……そんな譯で昨夜は家族一同を集めて私の決心を話し、自分も年はとつたがまだ働けない體でもない一つこれからは石にかちりついても、そしてどんな仕事をしても働きぬくから皆もセガレと同じ氣持で働かう。おめくとお役所の厄介になつては第一セガレに申譯がないと一夜を語り明しましたが最後に五人が堅く手を握りあつて強く生きることを誓ひました。……何とかして必ず起つて行きますから……」

語り終つて既に手續の書類まで出來た當局の扶助を斷つて厚く御禮を述べて辭去した。

#### 田邊 智恵子 氏

大森區調布嶺町一ノ四七七  
本人は「親切な産婆さん」として近所での評判になつてゐるが時局に際しても自分の職業を通して何分か國家に御奉公したいといふ堅い信念から出征者の家族に對しては特に面倒よく親身も及ばぬ世話をしてゐた。本人は勿論之をひた隠しに隠して決して人に漏さぬ陰徳の婦女子であつた。それがたま／＼大森區役所社會課員の知る所となつた、話といふのは斯うだ——  
久ヶ原町一〇五六番地に住む榎田爲作は大工を業として一家の生計を立てゝゐたが今次の事變で應召九月十七日勇躍して出征した後田邊さんは時々其留守宅を訪ねて身重な妻女タツの診察等に當つてゐたが十一月二十六日タツ女は女兒を分娩した、田邊さんは萬端の世話から後仕末まで一切を濟まし少しの報酬をも貰ふとはしない、お蔭で親子共肥立ちもよく成長してゐる。  
此事が同家を訪問した大森區役所社會課員にタツ女が涙と共に物語る始終の話に田邊さんの奇篤な行爲が知れた。

#### 長岡 はる子 氏

大森區四丁目二〇五番地

長岡はる子さんは米澤市の富裕な家に生れた、幼少の折は何一つ不自由なく育つたが父の病死に加へて大正六年の米澤市の大火に會ひ遂に破産の憂目を見た。高等女學校を中途退學したはる子さんは意を決して上京し勉強に勞働に精進しつゝあつたが世話する人があつて數年前現在の長岡氏と結婚今は圓滿な家庭に二兒の母となつてゐる。

一方はる子さんの生家一家もはる子さんの後を慕ふて上京大正八年以來はる女の弟で長男の孝君を中心に家族八人營々としてひたすら再興の爲努力を續けてゐた。ところが豫て軍籍にあつた孝君も召集狀に接して勇躍壯途に上つた。生活の中心を失つた此家は當局の扶助を受けることゝなつた。之を見たはる女は未だ二十六といふ若さながら再び意を決し己が生家の窮狀を救はんと夫君に圖り帝國女子醫專附屬幼稚園の小使と

なり其給料を同家の弟妹の養育に供してゐる。朝は未だ明けきらぬ中に起き出で我家の仕度をすまし夫を送り出しては二兒を連れ前記幼稚園に至り孜孜として倦むことを知らない働振り、此事情を知つた同校に於てははる女の此健氣な奮闘に同情と絶讃の辭を擧げてゐる。

身を粉にして生家に捧ぐるはる女の懸命な働き之も隠れた銃後美談の一つであらう。(谷戸町會提)

#### 一錢贖金に依る銃後の後援

東調布第一尋常小學校

同校では昭和十二年十年以來職員は拾錢、兒童は一錢宛毎月贖金することを申合せ今尙之を實施してゐる、そして其贖金は十月分は慰問袋三十個を作つて陸軍省に献納し、十一月分は慰問袋二十六個として同校學區内の出征兵士の家庭を訪問して之を贈り、十二月から本年二月までの分合計五拾參圓六拾六錢也は大森



區銃後々援連絡委員會に寄附された。

一時噴火山の様に燃え上つた銃後々援の焔が時の經つと共に下火になり勝ちの中に一錢づゝの力強い後援が東亞永遠の和平の礎となるを思ふ時僅が一錢の使ひ道もあだにはならぬといふことを強く感ぜられる。

右の外同校では學校の一隅に空箱を備へて置き兒童が空罐、古釘を集めたこともあるが大勢の手は恐ろしいもので其賣上げも一ヶ月には相當の額に上つたさうだ。

## 銃後の花

鈴木安久君

大森區田園調布二ノ七九九

君資性穩健、質實にして夙に地方自治の爲に貢獻するところ多く、區長及び町會長又は相談役として功績大いに見るべきものあり。

今次事變起るに當りては應召者家族に同情し種々奔

走せり。其一例——借家人某氏七月二十八日召集され

ることになつた。月末なのに其月分から家賃拾貳圓を免除し召集解除になる迄實行する旨を本人に告げて出征せしめた外、出征者の四名の家族にのし餅三枚宛を又他の一名に野しては其上に木炭一俵を年末に贈つた其の上何かと應召者に厚意を示し家族を慰藉しつゝある。それかあらぬか義弟長島惣次郎氏亦義心に富み年末に味噌一罐づゝを應召者家庭に贈つたといふ。義勇奉公の精神は何人も渝らざる所なるも斯の如きは録して以て銃後の花として推賞するに足る。

——小林金治氏寄——

高橋ミヨ君(四六才)

大森區池上徳持町三七八  
高橋和兵衛妻(運送店)

卒先して國防婦人會に入會し爾來家事の傍會員の募集に或は出征又は入隊者の歡送に自ら會旗を捧持し同町内は勿論附近町外の者にまで出向き殆んど之を缺か

したることなし、其純真而も信念に燃ゆる行爲賞すべし。

## 杉村部隊の一等兵成川彦一君の妻女

——大森九丁目四、二五二——

「愛兒の死知らず、片假名の便り、銃後の妻を泣かす」……………東朝(三月十二日)

「亡き子の代筆を學校に涙の依頼

”死、知らぬ戦場の父へ”……………

讀賣(三月十二日)

「何で、死んだ」と書けやうか——涙で綴る偽手紙  
軍國の妻、斷腸の嘘。」 都(三月十二日)

いとしの愛兒の死を秘めて戦線にある夫の武勳を祈る勇士の妻の銃後美談——

妻女さくさん(三七)は昨夏以來はつ江(一三)長男英吉(七)次女ふさ子(四)の三兒をかゝへて北支戦線に活躍する夫彦一君の立派な働きと武運長久を祈りつゝ銃後を護つてゐたがたま／＼長男英吉君が昨年十月

病床についた。萬一の事があつては戦線にある夫に申譯ないと看護の手を盡したが其甲斐なく死去、然し之を夫に報らせて萬一少しでも心をにぶらせる様な事があつてはと決意、慰問袋や千人針を送り「一同皆元氣ですから御安心下さい。どうぞ皇國の爲十二分に御奉公下さい……」と軍人の妻として立派な態度——ところが數日前夫からは亡き英吉君宛に自分の寫眞を添へ「慰問袋を有難う、學校では先生の教を守り家にあつてはお母さんの言ふ事を聞いて立派な人になつて下さい」と英吉君に讀める様に片假名で書いた便りを寄せて来た。これを見たさくさんははたと困つた。いく度英吉君の筆蹟に似せて其返事を書いたがうまくゆかず思ひ餘つた末、英吉君の級友に返事を書いて貰はうと小學校に受持先生であつた佐藤訓導を訪ねて苦衷を涙と共に之を話して頼んだ。傍に居つた峰岸校長もさくさんの雄々しい態度に感激しその眞情をくんだが、「いつまでもかくせるものでなし……」と諭して代筆をやめ十一日峰岸校長はこの事情を綴つて直接部隊長



の許まで手紙を送つた。

此間受持駐在巡查大竹さん(別項所載)の親切な取  
計ひも人情の麗しさを物語る挿話である。

### 金子 くに氏 (三二)

大森區池上徳持町六七

右兩人は事變起るや如何にもして銃後々援の實を擧  
げんと決意し隣家の小野はつ氏をも誘ひ打連れて近所  
の草原、道端に到り家事の餘暇、草刈をなし之を乾草  
として陸軍省に馬糧として寄贈したが其量は積つて四  
十貫の多さを算すと。農村にあらざる土地柄としては  
誠に之れ熱誠の結晶であり稀有の篤行と稱すべし。加  
之兩人は晒木綿を以て犢鼻褌七十一人分を作り之を陸  
軍省に寄贈する等如何にも女らしき銃後の務めぶりとい  
へませう。

### 早津 四良三郎君 (四二歳)

大森區徳持町二一三 建築業

君は本區池上分團第五班理事として在郷軍人會の爲  
に常に獻心的の努力をされつゝあり此度の支那事變に  
より出征者ある度には必ず見送りに参加之を激勵する

### 小林 幸男君

大森區池上徳持町八九小林豊次郎(四男)

幸男君は池上尋常高等小學校の兒童で目下高等科第  
一學年に在學中である。銃後々援資金募集の擧あるを  
耳にするや自ら町會長の許に銅貨のみで金壹圓六錢を  
持参して之を寄附した。金額の點から云へば如何にも  
零細なものだが根氣よく貯へたものを惜氣もなく銃後  
の爲に齎出した其心情を察する時、所謂富者の萬燈に  
勝るの感を強くする。

### 小山 うめ氏 (四〇)

大森區池上徳持町六六

を常とす。又常に出征者の家族の生活状態に注意し偶  
々町内の者にて當局より扶助を受くるを要する如きも  
のある時は薪炭一俵づゝを送りて嚴寒時に於ける生計  
を助け其恩澤を受けたる家族二十餘に及ぶ、而も本人  
は自己の名を出さず常に在郷軍人會分團よりの寄贈と  
稱し居れりと其隠徳誠に賞すべきものであらう。

### 大森出征家族後援會

會長 岡崎榮松殿

### 未知の人にも此同情

昭和十二年八月十九日附、谷川部隊、田中隊の速水  
政雄氏から東調布署長宛左記の書面が到達した。

拜啓時下初秋の候御尊家益々御清康の段奉大賀候  
陳者小生今般召集を受け来る十九日午後二時現隊  
を出發征途に上る者に候が小生の職業は土地賣買  
の仲介業にて此七月八月は夏枯れにて困却の極に  
達し應召するにも後事を託する何人も無く後には  
病母と老いたる父の二人にて小生の萬一の場合に  
も如何とも爲し難き折小生には未知の人池上徳持  
町六五、石川博資氏といふ方小生の苦境を聞き傳  
へられ小生には全く意外なる御配慮を蒙りしのみ  
か萬一の場合を御推察に相成り金貳千圓の保険ま  
で附して後事の憂もなからしむると共に小生の出

### 趣意書

今般ノ事變ニ際シ充員召集ヲ拜受勇躍國防第一線ニ  
立ツ名譽ヲ擔ヒ入隊致セシ處不計モ往年ノ負傷カ禍ヒ  
致シ其機會ヲ逸シ残念ナガラ歸郷致シマシタ。

就而 出發ニ際シテノ友人知己ノ赤誠ヲ私スルニ忍  
ビズ國防獻金及區、町會出征家族後援基金ト致シ度茲  
ニ其一部ヲ寄贈致シマス

昭和十二年八月二十四日

鈴木 一 惠



征を祝し被下 小生は感謝感激の言葉なく唯 感  
涙にむせび申候

此御厚恩に酬ゆるには何を以てすべきか唯一途奉  
公の誠を盡すのみと深く決心仕り候 聞けば  
同氏は小生のみならず自己所有の家屋に住む人出  
征すれば家賃の免除の外何かと御世話相成る由貴  
管内に斯る篤行の士存するを署長殿に御傳へし何  
かの機会に御公表の上銃後を守り いよく堅き  
國民精神の御發揚の材料に供せられ度出征に際し  
て謹みて御願申上候……(後略)

九月十八日

谷川部隊田中隊 速 水 政 雄

東調布警察署長殿

右の書面に依り東調布警察にて調査の結果前記石川  
氏は速水氏とは全く未知の者なるが兼て二千圓の生命  
保険を附しあり失効になるところを自ら料金四十四圓  
六十六錢を大同生命保險會社に拂込みをなし保險契約  
の繼續をなしたり。本人は勿論一家の喜び唯々感謝の

涙のみなりきといふ。

尚池上徳持町五二三番地に所有する貸家の居住者出  
征に付き家賃の免除をなしてゐる。

其他同氏は

一、東調布警察署管内の出征軍人家族で比較的生計  
困難な者に對し白米の贈與方を依頼し現在までに贈與  
せし分量一斗、二斗宛は積つて今約三百圓に値する位  
となり今尙繼續中と。

二、右同様歳末餅代の一助にもと金五百圓を提供せ  
られたので該當者百二十名に對し昨年十二月二十八日  
夫々交付した。

其他出征者遺家族に對し親身も及ばず救護の手を延  
ばす、篤行の士である。(東調布署提供)

前 原 謙 治 氏

大森區調布鶴木町二六七

本年一月三十日東調布警察署に出頭し本年一月子供  
の法要を時節柄極めて質素に行ひ費用の一部を割き管

内に於ける出征軍人家族中御困りの方に贈與相成り度  
しとて金百圓を當署に託せるを以て調査の結果該當者  
に夫々贈與せり。(東調布警察署報)

◆出征軍人家族に對する慰問金贈與

一、田園調布二丁目某婦人は自己町内に於ける出征軍  
人家族四戸を訪問し名も告げず金拾圓宛慰問金とし  
て贈呈し立ち去りたるが家族は何れも感謝しつゝあ  
り。(特に名を秘す)

二、田園調布二丁目の某婦人は子供の七五三の御祝費  
を質素になし其金を五拾圓町内の出征軍人家族に贈  
與せり。(特に名を秘す)

松 尾 由 次 郎 氏

大森區大森一丁目二〇八

一、事變應召者長谷川福松君の貸地代を免除す  
一、事變下に創設された町内少年團に團服新調費とし  
て金壹百圓を寄贈

一、昭和十二年十二月、大森一丁目よりの出征者家  
族に對し歳暮として金壹百圓を寄贈

右の外町會長として事變發生以來兵士を送迎は元よ  
り會員役員を督勵率先して事に當る。

(大森一丁目平田氏寄)

西 尾 政 造 氏

大森區大森一丁目一四〇

事變下に創設された町内少年團の爲に團服新調費と  
して金壹百圓を寄贈し、昭和十二年十二月には大森一  
丁目内の出征兵士家族に對し其父親惣助氏と共に金百  
五拾圓を歳暮として寄贈する等、銃後を護るに率先  
す。(大森一丁目平田氏寄)

松 野 芳 太 郎 氏

大森區大森一丁目一二七

氏は昭和十二年十月以來應召者の家族を自ら經營せ



る活動常設館に招待し事變ニュース其他を觀覽させ以て家族慰安につくせり而して其配布せる招待券實に壹萬枚に達すと。其上本年二月二十三日、舊大森町の愛國婦人會分區主催の出征者家族慰安會開催に際しては大森劇場を無料提供し且つ其演藝をも私費を以て觀覽せしむる等蓋し氏が平素の義侠心の發露といふべし。

(大森一丁目平田氏寄)

### 慰問品の配布

新井宿中町會、新井宿二丁目一五七〇番地林松次郎氏は金五拾圓也を據出、醬油等にかへて同町内出征家族に對し夫々配布された。

### 綴方「出征兵士」の御褒美を

#### 皇軍慰問費に

大森三丁目一九番地中澤仲治氏長男

大森第二校六年 中澤陽太郎君

陽太郎君は學校の綴方に「出征兵士」といふ題で附近の米屋主人の出征の模様を書いて出すと先生から、「三重マル」を貰つた。同君はこれを其米屋さんに持参すると家族は喜んで涙と共に戦地に居る主人に全文を寫しとつて送つたが其時御褒美として五拾錢を與へた、同君は九月二十九日夕方母親に連れられて區役所を訪れ、皇軍慰問費にと寄附して行つた。

### 此子にして此母

馬込町東三丁目八八二家主飯田赫三郎氏は別項所載の通り應召者に對し家賃を半減して借家人及近隣の賞讃の的となつてゐるが同氏の母は五十二歳であるが日頃健康である、此際國家の爲何か働きたいと區役所に申出られた。健氣な銃後の母よ。

### 清水窪小學校職員兒童等の義舉

區内清水窪小學校では十月十九日出征兵士武運長久祈願、國民精神總動員身心鍛鍊の爲左記の通り各學年

別各神社に徒歩參拜遠足を決行し乗車賃は勿論菓子菓物代をも節約して此程兒童五九八名、教員一五名、使丁給仕四名分を取纏め金壹百拾圓也を十月二十二日同校岡村校長は區役所に出頭、大森區銃後援連絡委員會宛寄附された。

因に其參拜神社は左の通り

(學校よりの距離)

第一學年	八幡神社(千束)	八軒
第二學年	八幡神社(馬込)	一〇軒
第三學年	建武神社	一八軒
第四學年	明治神宮	一八軒
第五學年	松陰神社	二二軒
第六學年	乃木神社	三〇軒
	靖國神社	

### 森ヶ崎交番勤務

#### 大竹巡查の義舉

森ヶ崎町五、五八五番地の應召者柏淵貞治氏の令息は身寄りもなく九月五日迄中野區の桃園小學校に居つ

たのを同氏が引取つて大森第四小學校に通はせ面倒を見てゐる、其外近所の應召者の妻女の出産に當つては目下産婆をしてゐる同氏の義妹をして無料で一切の世話をさせた外自らは管轄内の出征者の家族を訪問、何やかやと親身も及ばぬ面倒を見る等、平素から町内の住民に親切な同氏は今次事變發生以來文字通り席温るに暇なしといふ奔走ぶりに附近の感激一層な評判で近隣からは生神様の様に慕はれてゐる。

### 家主地主の義舉

出征者家族に對し地代、家賃を全免或は減額されつゝあるといふ左記諸氏に敬意を表します。

田園調布二ノ八九七	内田 末藏氏
大森七ノ二二〇	山本 半藏氏
田園調布二ノ七九九	鈴木 安久氏
市野倉町二六一	横溝 重太郎氏
馬込町東三ノ八八二	飯田 赫三郎氏



大森區久ヶ原町四三一	平林 久藏氏
同 四八六	長島 鈴吉氏
田園調布二ノ八五九	内田 正彦氏
南千束町八〇	高柳 直兵衛氏
田園調布二ノ七九九	鈴木 淺吉氏
雪ヶ谷町一、三一三	鈴木 重松氏
調布嶺町一ノ四〇九	吉村 キヨ氏
田園調布四ノ一〇〇	落合 甲之助氏
大森三ノ一六〇	田中 要藏氏
入新井一ノ二三	渡邊 重五郎氏
大森九ノ四、一九一	伊藤 義雄氏
馬込町東三ノ七一九	加藤 角太郎氏
入新井一ノ一〇	平林 政五郎氏
大森二ノ一二	高梨 浩三郎氏

### 大森區所職員及區内小學校の義舉

大森區役所には目下約二百二十名の職員が勤務してゐるが區内出動將士の銃後々援資金として十月分の俸

給中より百分の一を大森區銃後々援連絡委員會に寄附した。

### 大森産婆會の美舉

同會は昭和十二年十月四日、大森區役所に役員會を開き、陸海軍省に夫々金參拾圓を、又大森區銃後々援連絡委員會に金五拾圓を寄附した。

### 出征者家族慰安大會

大森一丁目北町會主催及同町會内各團體後援のもとに十一月五日午後五時より大森第五小學校に於て出征軍人家族の慰安會を催し、日暮少將閣下の講演、事變ニュース映畫等があつて盛會であつた。

### 出征軍人家族に對し感謝と慰安の會

昭和十二年十二月二十二日午後一時から區内入新井第一小學校に於て日本家庭精神會主催大森區役所社會課後援のもとに區内出征軍人家族九百世帯、千五百人余を招待し出征軍人家族に對し感謝と慰安の會を催した。

尙同日參會家族に對し同會主事島田糧輔氏から菓子九百袋を、又要扶助家族に白ネル七百反の寄贈があつた。

### 〇本區に寄託された慰問袋、慰問品等

- 1、バット 百個 (海軍省へ)
- 2、慰問袋 五個、銀紙 二百枚 (海軍省へ)  
堤方町ライオンズスレート株式會社内 猿田 壽氏
- 3、慰問袋 五十三個 (海軍省へ)  
愛國婦人會大森區分會 馬込 分區
- 4、慰問袋 十個 (海軍省へ)  
池上尋常高等小學校
- 5、慰問袋 一個宛 (海軍省へ)  
伴ゆり氏、大津よつ氏
- 6、慰問袋 山王二ノ二天一  
水富八十子 外三名
- 7、慰問袋 無名氏
- 8、慰問袋 大森四ノ七五  
吉岡 勝治氏
- 9、慰問畫、慰問文  
愛國婦人會千束分區
- 10、慰問袋 大森一ノ三一八  
村石イト子氏
- 11、慰問袋 大森一ノ一四一  
小松 スミ氏
- 12、金五拾錢 大森一ノ一五一  
丸橋 なつ子氏
- 13、繙帶一箱 田園調布三ノ一四〇  
ペトロ、シャルボノ氏
- 14、慰問袋 大森、都新地平林ふみ方  
多加 奴氏
- 15、慰問袋 新井宿四ノ一〇〇九倉田 百三氏
- 16、金五圓也 大森九ノ四六三九 矢部 信次郎氏
- 17、大森子供の會 展覽會賣上代金三拾九圓參拾錢  
慰問文、慰問畫 吉崎家政女學院



銃後の團體



## ○大森區會

一、昭和十二年七月二日、出征者に對する歡送文議決  
(卷頭掲載)午後應召者の出征に際し之を贈ることとす。

二、同年七月三十日、陸海軍献納金を議決各議員釀出により陸軍省に金壹百圓、海軍省に金壹百圓を献納せり。

三、同年九月二十七日、各議員の釀金に依り金貳百貳拾圓を大森區銃後連絡委員會に寄附せり。

四、同年十月二十日、區會に於て北支派遣軍最高指揮官、上海派遣軍最高指揮官、第三艦隊司令長官及び上海陸戰隊司令官に感謝文贈呈を議決す。

### 感謝文

今次支那事變ニ當リ指揮官トシテ畫策セララル、閣下並ニ將士トシテ忠勇義烈ニ因ル赫々ノ功績ハ吾等大森區民ノ感激措ク能ハザル所ニシテ一層銃後ノ後援ニ精進セムコトヲ誓フ

冀クハ閣下益々自愛、東亞完定ノ大業ヲ成就セラレ  
ンコトヲ 茲ニ東京市大森區會ハ赤誠ヲ披瀝シ決議ヲ  
以テ感謝ノ意ヲ表ス

昭和十二年十月二十日

東京市大森區長 岡崎 榮松

東京市大森區會議長 佛木 剛策

五、同年九月二日、全員協議會に於て事變對策を協議  
國民精神總動員に關する實行方法に付協議す。

六、同年十一月十一日、皇軍武運長久祈願參拜の件を  
議決、議員を四班に分ち左記神社に自費參拜す。

甲班——伊勢神宮、熱田神宮

乙班——諏訪神社

丙班——香取神社、鹿島神社

丁班——鹽釜神社

七、同年十二月八日、區會に於て南京陷落祝賀並皇軍  
武運長久祈願の爲區内神社を參拜の件を議決、十  
二月十三日之を實行せり。

八、同年十二月八日、全員協議會に於て傷病兵慰問



の件を決定、議員を六班に分ち左の通り各病院を慰問し各金三十圓宛の見舞金を贈呈す。

- 第一班 甲府陸軍病院
- 第二班 下志津陸軍病院
- 第三班 横須賀海軍病院
- 第四班 東京陸軍々醫學校
- 第五班 東京第一陸軍病院
- 第六班 東京第二陸軍病院

九、同年十二月八日の全員協議會に於て南京陥落を期し本區出征將士に感謝文發送の件を決定し町會長を通じて之を實行す、其本文左の如し。

拜啓 貴下今次事變勃發するや召に應じて勇躍征途に上り、北支に南支に或は北滿國境警備又は匪賊討伐に或は其他の要務に就き身命を捧げて帝國權益の擁護、東亞安定の大目的の下に奮闘せらるゝの赤誠盡忠に對し吾等は唯々感激感謝ある而已 謹みて貴下で敬意を表し武運長久を祈る

昭和十二年十二月 南京陥落日

東京市大森區會議員

### ○大森區銃後々援連絡委員會

#### 一、設立の經過

昭和十二年七月中旬事變應召兵並に家族慰問救援の爲之が資金を大森區兵事義會に仰ぎたるも同會は財政的に充分なる銃後々援事業施設遂行不可能なる現狀にあり將來を懸念せられたる所八月東京出征將士後援資金募集に際し各町會長の格別なる協力を得て本區割當額を遙に超過する募金成績を收め、九月二日割當額萬參千參百圓を東京出征將士後援會に送納、殘額を區内銃後々援事業に充當するに至り漸く活潑なる活動に入り更に九月二十一日、大森區會外十二團體代表者を招集協議の結果大森區銃後々援連絡委員會の結成を見るに至り愈々本格的銃後々援の事業を遂行するに至れり。

#### 一、事業の概要(昭和一一、一二、末調)

1. 出動將士に對しては一人參圓宛贈呈の餞別を送る贈呈人員二千五百九十六人、金額七千九百三十六圓なり。(其後繼續中)以下同斷
2. 要扶助家族對しては金拾圓宛の臨時生活扶助金を贈す。贈呈人員六百十人、金額六千百圓なり。
3. 戦病死者家族に對しては委員長(區長)は最寄區會議員と共に親しく弔問なし、公葬執行に際し五拾圓宛の弔慰金を贈呈す。贈呈人員十二人、金額六百圓なり。
4. 傷病者家族に對しては區長は最寄區會議員と共に留守宅を見舞し同時に金貳拾圓を贈呈す。贈呈人員六十一人、金額壹千二百二拾圓なり。
5. 出征に際しては係員各家庭を訪問し慰問す。尙十二月二十一日入新井第一小學校に於て日本家庭獎勵會と共同主催に依り留守家族の慰安會を開催せり。
6. 出動將士慰問の爲町會長の手を通し慰問袋を募集

したる結果四萬壹千百十六個の好成绩を收め十二月十日現地に發送せり。

7. 要扶助家庭に對し歳末慰問闘餅料として金貳圓也宛贈呈す。人員五百三十四人金額壹千六十八圓なり。

8. 軍事扶助法及び地方委員會議の扶助を受け得ざる要扶助家族に對し一家族最大限度月額金拾五圓以内を贈呈す其人員二人、金額月額二十五圓なり。

#### 役員

委員長	大森區長	岡崎	榮松
理事	區會議長	佛木	剛策
同	帝國在郷軍人會	子爵立花	種忠
同	大森區聯合分會長	大倉	勝馬
同	工場協會	横濱	俊
同	大森支部長	島田	金藏
同	谷戸町會長	岩井	文太郎
同	南町會長	岩井	文太郎
同	北千束町會長	谷岡	八十吉
同	洗足榮久會長	檜山	友藏
同	鷗ノ木町會長	天明	啓三郎



### ○新井宿南町會

本町會は會員三千餘を有し大森區内隨一の大明會で現區會議員岩井文太郎が其會長である。町内は下水等の衛生設備をはじめ各種の施設がよく行はれ町内は誠に和衷協同して一家の如しといひ度い位一度本町内に居を定めた者は他に轉居するのを好まない程家庭の事情によつては随分よく面倒を見る町會だといふ評判がある。平素がそんな風である。一朝事ある時何でそのまゝおくべき、昨年事變起るや岩井町會長を先頭に役員一同率先し出征者の歡送は元より其の家族の救護慰安に出征者の慰問に萬全を期し出征將士をして些の心残を起させぬ様にと百万手を盡し目覺しい活動をしてゐる。其の中でも本年二月十三日鎮守春日神社々頭に擧げた第二回の國威宣揚、出征將士武運長久祈願祭は來會者の多いこと稀に見る盛儀であつたばかりでなく用意の周到さに於て此種催しとしては實に行届いたものであつた。

當日は一同社前の所定の位置に着席主催者の挨拶の後、君が代の齊唱に始まりいと嚴肅に行はれた。出征者の家族は或は子供の手をひき或は若者にいたはられて式に列り式後各御供物の分配を受け記念撮影の後一同散會しあたかも一大家族の如き觀を呈した。蓋し此記念寫眞は町會の手に依つて慰問品、お守札に同封されて各勇士に一杓づゝ送られた。

因に本町會からの出征者は實に百六十九名(昭和十三年二月調)の多きに上つてゐる。

### ○新井宿六丁目銃後々援會

本會は本區内新井宿六丁目在住者約六百五十戸を會員とし昭和十二年八月創立された。各戸毎月據出する會費と有志の寄附を財源として出征將士家族を訪問其事情に應じて生計を援助慰問し、病患者ある場合には直ちに醫師を派し役員は懇に見舞ひ、隨時家族の慰安會を催し土産物を贈る等出征者の家族の爲に盡す外、

出征將士の現地へは小包を以て慰問品を贈り激勵と留守宅の無事安全を通知する等銃後々援に遺憾なく活動してゐる。

### 大森區銃後後援連絡委員會

寄附者 (同會直接撥分)

金參百圓也	東京輕合金製作所
金壹百五十圓也	日本鋼鐵家具製作所
金壹百圓也	神田政吉
金五拾圓也	島喜鐵工所
金五拾圓也	三立製作所
金壹百圓也	神保電器製作所
金壹百圓也	鬼足袋株式會社
金壹百五十圓也	ヤンソン製作所
金五拾圓也	富岡光學機械製作所
金壹百圓也	山武商會大森計器工場
金參百圓也	山中電機株式會社
金壹百圓也	日本ポリドル
金五拾圓也	森電機株式會社
金壹百圓也	福本金太郎
金壹百圓也	外川製作所

### ○馬込東二丁目東町會

當町會内には別に美談逸話と申すべきもの無之候も事變發生當時より毎月各戸より最低金拾錢より最高金壹圓迄を醸出し月額金九拾圓を出征者家族に對し一戸最低金貳圓より最高金八圓迄を贈呈する事とし隔月に鎮守北野神社に各家族を招し武運長久の祈願を行ふと共に茶菓を饗して慰藉の談話等をなし其月の慰問金を呈し又隔月に町會役員打揃ふて各家庭を訪問して前記の慰問金を贈呈しつゝあり。

これは事變終了迄施行の豫定にて現に半歳以上に亘り町氏一致の後援により現に實行しつゝあり。

大森區馬込東二丁目

東町會長 平林藤次郎(報)



金壹百圓也	オソ本舖	金五拾圓也	木村孝平
金壹百圓也	後藤機械工具製作所	金壹百五十圓也	堤方製作所
金八拾圓也	株式會社 有恒社	金五拾圓也	理研真空工業大森工場
金參百圓也	日本通信工業大森支店	金貳千五百圓也	日本特殊鋼株式會社
金五圓也	尾形祐壽	金五拾圓也	東京精機製作所
金壹百貳拾圓也	東京電氣商事大森工場	金貳百圓也	不二サツシ製作所
金壹千五拾四圓七拾七錢	天理教大森區支會長	金五百圓也	田中計器製作所
金五拾圓也	ライオンズレイト會社	金貳百圓也	日本バルブ製作所
金壹百圓也	大野化學機械株式會社	金參拾圓也	大森バルブ工業所
金壹百圓也	中 畔 幾 太 郎	金參圓也	西 澤 信 夫
金五千圓也	東京瓦斯電氣工業株式會社	金參圓也	柏 和 尙
金貳百圓也	大同信號株式會社	金貳百貳拾圓也	大森區會議員
金五百圓也	日本內燃機械株式會社	金參圓也	三 部 市 太 郎
金參百圓也	富士川製作所	金貳圓六拾貳錢也	池上第二兒童
金五百圓也	中央工業株式會社大森工場	馬込町二ノ一五〇	
金貳百圓也	日本信號株式會社大森工場	金五圓也	大 竹 利 郎 氏
金貳百圓也	森 芳 一	金百五十圓也	無 名 氏
金拾六圓七拾五錢也	日蓮宗 大森結社	金六圓也	馬込町 某 氏

雪ヶ谷町六〇

金 圓也	藤 原 優 代 氏
金七拾六圓貳拾錢	山 谷 諏 訪 會
金拾圓也	笠 原 寅 吉 氏
金五拾圓貳拾錢(展覽會) 賣上金	大森區研究會圖書研究部
金八圓也	池雪小學校職員兒童有志
金貳圓六拾貳錢	池上第二校兒童有志
新井宿六ノ六六四	
金貳圓也 少年新聞配達	榎 本 金 八 郎 君
大森三丁目一二四番地	
金一圓宛	藤 田 保 氏(長女)
大森第二校五年	喜 美 子 君
同 三年	健 一 君
山王一丁目二八一三	
金參百圓也	齋 藤 慶 三 氏
新井宿四丁目一、一二三	
金壹百圓也	船 津 新 四 郎 氏

久ヶ原町四五五

金貳拾圓也	阿 部 一 郎 氏
(故阿部少佐百ヶ日に際し)	

(二男忠司氏供養費一部)



統後各種團體代表者(昭和十三年三月現在)

大森區統後々援連絡委員長	岡崎 榮松
大森區教育會會長	佛木 剛策
大森區町會聯合會會長	小沼 虎之助
大森區防務義會會長	子爵 立花 種忠
大森區青年團團長	大森區學務委員長
大森區女子青年團團長	帝國在郷軍人會大森區聯合分會長
大森區團體後援會大森支部長	將校團大森分團長
大森區會議長	入新井分會長
大森區齒科醫師會會長	大森分會長
大森區藥劑師會會長	馬 込 分 會 長
愛國婦人會大森區分會長	池 上 分 會 長
大森分區長	東 調 布 分 會 長
入新井分區長	帝國傷痍軍人會大森分會長
馬込分區長	大森區小學校長會理事長
池上分區長	大森區醫師會會長
千東分區長	
東調布分區長	
大日本國防婦人會大森區第一分會長	
大森區第二分會長	
大森區第三分會長	
大森區第四分會長	
大森區第五分會長	
大森區第六分會長	
大森區第七分會長	
大森區第八分會長	
大森區神職會會長	
大森區佛教聯合會理事長	

所澤 藤重	大森區齒科醫師會會長
竹中 稻美	大森區藥劑師會會長
岡崎 菊代	愛國婦人會大森區分會長
松尾 せい	大森分區長
平林 とめ	入新井分區長
藤岡 ツルエ	馬込分區長
小原 ちか子	池上分區長
岸本 鐵子	千東分區長
細川 武子	東調布分區長
佐藤 益子	大日本國防婦人會大森區第一分會長
森田 まさを	大森區第二分會長
廣中 柳月	大森區第三分會長
上村 キヨノ	大森區第四分會長
林山 孝子	大森區第五分會長
白石 定子	大森區第六分會長
内村 美子	大森區第七分會長
山口 伊麻子	大森區第八分會長
大森 良	大森區神職會會長
石川 謙靜	大森區佛教聯合會理事長

編輯後記

一、斯種善行美談は當人から發表するものは先づないのでありますから世間に知られないのが普通で、それを集めやうといふのですから凡そ困難な仕事であります、随つて此所に集録されない幾多の美事、義舉がまだ、澤山あることと思はれます。

一、本會では此企を發表すると同時に区内の有志ばかりでなく可成廣く依頼状を出しガスターを配布したりしたのですが本會の趣旨が未だ一般には徹底せぬきらいが無いでもありません、本會の企ては此一篇を以て終る積りはないのでありますから尙續々と資料提供下さる様各位の御聲援を希望致します。

一、町會方面でも随分活動してゐる向もあり其の役員等も寢食を忘れて東奔西走されてゐる方もあることは想像されませんが十分な調も出来ない爲今回は其の二三を紹介するに止めました。

尙最後に本美談集編纂に際し資料募集の要項を次に掲げて御参考に供します。今後とも御協力下さる様御願申上ます。

美談逸話集要項

◎名稱『大森區の生んだ美談逸話集』

◎収録すべき事項

- 一、戦死者の戦歴其他
- 二、出征將士の逸話
- 1、戦線に於ける武勳
- 2、出征勇士よりの戦線だより
- 3、陣中 逸話
- 4、出征者の統後に寄せたる特殊行爲其他
- 三、戦死傷者及出征者遺家族の健氣な備ぶり
- 四、戦後區民の善行美談
- 2、献金其他の行爲
- 五、資源愛護に關する佳話
- 六、其他時局の生んだ美談 逸話等

◎資料は左記いづれかに依り御提供下さい

- 一、原稿に依るもの
- 但、用紙は区内小學校に用意しあり
- 二、新聞紙其他印刷物に収録せるものは其切抜
- 但、此場合は新聞紙名等附記のこと
- 三、其他の方法
- 葉書、手紙等にて要領御通知下さるも可

◎資料送附先

- 一、大森區役所内『大森區教育會』
- 二、区内小學校

◎締切

編輯の都合上可成お早く願度  
資料御提供下さった方に美談集一部宛 贈呈の豫定



昭和十三年六月廿五日印刷  
昭和十三年七月五日發行

【非賣品】

編輯者 大森區教育會

發行者 大森區役所內

大森區教育會

印刷者 東京市大森區北千束町七七二

岸田武男

東京市大森區大森六ノ二七五〇(大森區役所內)

發行所 大森區教育會

電話大森七五六一五



383  
441



終